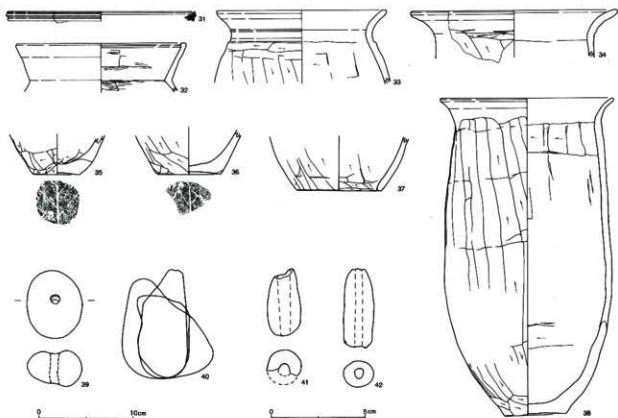


第52図 第17号住居跡出土遺物(2)



を測る。

主柱穴の内側に位置する3本(P2、P8、P11)は第22号住居跡に伴う可能性が高い。

壁は東隅付近では斜行するが、他の部分ではほぼ直立し、深さ0.3mを測る。南壁～東壁下にかけて、黒色土を充填する幅0.18m前後の壁溝が存在するが、他の部分では検出されていない。

壁柱穴が壁溝内で3本、東隅部で3本検出されたが、前者はやや大形、後者は壁隅に沿っており小形である。P5では柱痕跡が検出された。東隅部の3本はわずかに内側に傾斜している。

床面出土遺物は主にカマド左袖部分と、主柱穴で囲まれた範囲内に比較的集中するが、後者は散在的で、カマド前面の床面上がやや多い。主に有段口縁の環形土器が出土している。

カマド左袖部分では、潰れた状態で出土した長甕以外にはほぼ完形の環、碗形土器が据え置かれたような状態で出土している。

掘り方は全体に不明瞭であるが、中央部を掘り残し、四周を掘り込む形態とみられる。

重複する第22、23号住居跡床面は本住居跡掘り方によって完全に破壊されている。第45号住居跡部分は埋め戻して床面としている。

カマドは南西壁(ほぼ中央)に設置され、遺存状態は比較的良好である。

燃焼部は箱形で0.45×0.86mを測り、底面はほぼ平坦。灰、炭化物が残るが、内面はそれほど焼けていない。煙道部へ段をなして移行すると考えられる。

煙道部は長く、0.98×0.29mを測る。断面は潰れているが方形とみられ、底面はほとんど平坦。上半部が比較的焼土が残り、以下底面及び煙出し口までほとんど焼けていない。

袖部は灰褐色粘土で構築される。掘り方埋め戻し後の構築と考えられる。

第17号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	柄	9.9	(3.6)		A1	B	B	20	埋土	口唇尖る、体部削り後ナテ
2	環	11.8	4.0		A1	A	B	60	No.6	口縁内湾、稜部ヨコナテ+削り
3	環	11.4	3.8		A1	A	C	50	埋土	口縁内湾、稜部ヨコナテ+削り
4	環	12.3	(4.1)		A2	A	B	30	No.8	口縁内湾、稜部ヨコナテ?+削り
5	環	13.0	4.7		A1	A	E	30	掘り方	口縁外反、体部削り後ナテ
6	環	12.0	4.3		A2	A	B	50	No.18	口縁内湾、稜部ヨコナテ+削り
7	環	13.1	4.3		C1	A	A	30	埋土	段部ヨコナテ、稜部ヨコナテ+削り
8	環	13.7	(4.8)		A1	A	C	25	No.9+10	口縁外反、稜部棒状工具?+削り
9	環	12.8	4.5		A1	A	C	50	No.4	口縁外反、稜部ヨコナテ+削り
10	環	13.9	(3.6)		AC1	A	B	25	埋土	段部ヨコナテ、稜部ヨコナテ+削り
11	環	13.6	(4.6)		AC1	A	B	50	埋土	段部ヨコナテ、稜部工具ナテ+削り
12	環	14.0	4.2		AC1	A	B	50	埋土	段部ヨコナテ、稜部工具ナテ+削り
13	環	13.9	(4.1)		AE1	A	F	40	埋土	段部棒状工具、稜部工具ナテ+削り
14	環	14.5	(4.5)		AC1	A	F	40	No.12	口唇沈陥段部棒状工具稜部棒状工具+削り
15	環	14.2	5.0		AE1	A	A	70	No.13	口唇沈陥段部棒状工具稜部棒状工具+削り
16	環	14.9	(4.5)		AE1	A	B	30	埋土	口唇沈陥段部棒状工具稜部棒状工具+削り
17	環	14.0	4.2		AE1	A	B	50	埋土	段部棒状工具、稜部棒状工具+削り
18	環	14.0	4.0		AE1	A	B	70	No.9	段部棒状工具、稜部棒状工具+削り
19	環	12.4	4.4		AC1	A	B	60	柱穴内出土	口縁直立、稜部棒状工具+削り
20	環	12.0	5.0		AC1	A	B	80		口唇沈陥、稜部棒状工具+削り
21	環	13.0	(5.8)		AC1	A	E	10	埋土	口唇直立、体部削り後指頭ナテ?
22	柄	14.7	(4.1)		AC1	A	A	10	埋土	口縁直立、体部削り
23	鉢	16.0	(5.3)		A1	A	B	20	埋土	口縁外反、体部削り
24	環	13.8	(7.9)		AC1	A	A	30	埋土	段部ヨコナテ、稜部ヨコナテ+削り
25	環	15.7	8.5		AC1	A	A	70	No.14	口縁工具ナテ、稜部工具ナテ+削り
26	環	18.2	9.6		A1	A	C	60	床面出土	口唇肥厚、稜部工具ナテ+削り、黒斑
27	環	10.5	7.2		A1	A	B	90	No.2	器肉厚い、体-底部指頭ナテ?
28	柄	11.1	9.7		A1	A	B	90	No.3	器肉厚い、体部指頭ナテ?黒斑
29	小形壺	8.7	5.5	7.2	A1	A	B	95	床面出土	複合口縁状、体部指頭ナテ?
30	高環	16.7	(4.1)		AC1	A	E	10	埋土	器肉厚く坏部改い
31	須臾器	20	(1.1)		F1	A	E	20	埋土	口唇上下凸出る
32	甕	17.9	(5.2)		D2	A	I	10	埋土	口唇内屈、内面ハケ?摩滅顯著
33	甕	18.1	(7.9)		E5	A	E	10	埋土	口唇沈陥、頸部横以下縦削り
34	甕	21.7	(5.1)		CE5	A	E	10	埋土	口縁やや外反、頸部斜め削りによる段
35	甕底部		(4.3)	5.1	AES	B	B	60	埋土	やや上げ底、底面木葉痕
36	甕底部		(4.8)	7.1	E5	A	B	70	柱穴内出土	やや上げ底、底面木葉痕
37	甕底部		(5.9)	9.1	A1	A	B	10	埋土	単孔大形、縦削り
38	甕	18.3	33.5	6.5	A5	A	B	70	カマド	口縁外反、外面縦削り、やや上げ底、黒斑
39	石鏃?	長径7.3×短径6.0×孔径1.0(cm)、重量200g								
41	土鏃	長径(3.5)×最大径1.8×孔径0.55(cm)、重量6.9g								
42	土鏃	長径(4.2)×最大径1.5×孔径0.4(cm)、重量8g								

第22号住居跡 (第49図)

本住居跡はK3M17グリッド付近に位置し、第4住居跡群に属する。第7、17、23号住居跡によって大部分を切られ、かろうじて残存するのはカマド煙道部のみである。

カマド軸方位はN-135°Eである。

煙道部は、1.06×0.22mを測り、深さ5cm前後と浅い。

柱穴は、第17号住居跡内に存在する3本(P2、P8、P11)と、掘り方中の小ピット1本が伴う可能性がある。

出土遺物のうち図示し得るもの(第50図)は、環形

土器の小破片2点のみで、口縁部が外反するものと、有段口縁のもので、いずれも体部が浅い。

図示した以外の出土土器総破片点数は37点である。

環形土器は口縁部が3点、体部が8点出土している。

甕形土器は口縁部が3点、胴部が22点、底部が1点出土している。

その他細石が1個体(長径10.5×幅6.4cm、重量182.5g)と、貝果穴灰泥岩2個体(総重量1.98g)が出土している。

第23号住居跡 (第53図)

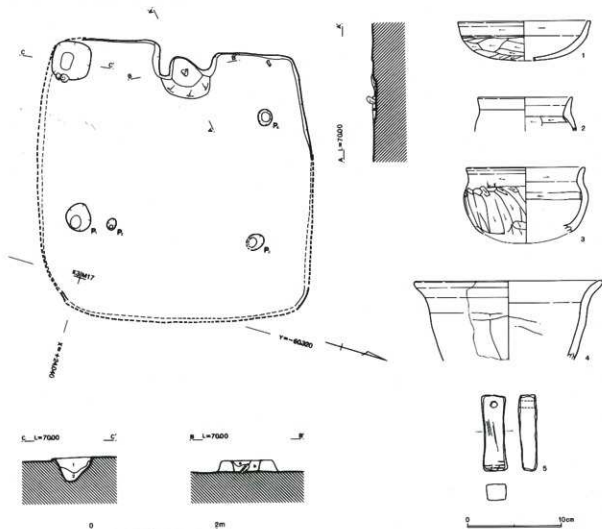
本住居跡は、第7、17号住居跡とともに検出され、同住居跡によって切られる。その他の周辺住居跡との新旧関係は不明である。

平面形は西壁部分以外はほとんど復元 (第22号住居跡カマド西側の段差は本住居跡の一部と認定した) で略方形、一辺4.48mを測る。主軸方位はN-103°-Wである。

床面は大部分が第17号住居跡と重複しており、不明確である。

壁はわずかに残り、ほぼ直立する。

第53図 第23号住居跡・出土遺物



第23住居跡遺土層註

- a 黒褐色シルト 粘性強、細粒砂、ロームブロック少量
- b 暗褐色シルト 粘性有、焼土ブロック多量、炭化物微量、細粒砂、ロームブロック少量

主柱穴は3本で、各柱穴間隔はP1P3が2.86m、P3P4が2.00mを測る。他にP1のやや内側に小ピットが1本存在する。

貯蔵穴は略方形で南西隅部分に位置し、0.61×0.60m、深さ0.37mを測る。上層から少量の変形土器片が流れ込んだ状態で、出土している。

カマドは西壁ほぼ中央部に設置され、遺存状態が悪く、ほとんど潰れた状態で、灰褐色粘土貼付けの袖基底部が僅かに残存する。燃焼部は箱形と考えられ、中央部に支脚石が検出された。煙道部は不明である。

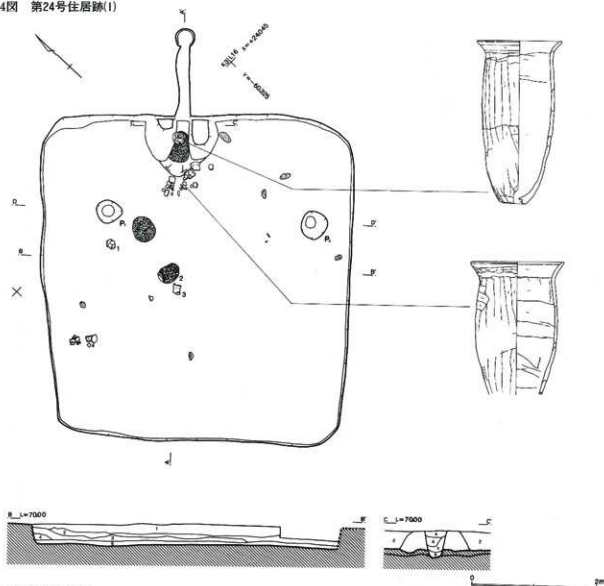
第23住居跡貯蔵穴土層註

- 1 黒褐色シルト 粘性有、焼土粒、焼土ブロック多量、細粒砂、ロームブロック少量
- 2 黒褐色シルト 砂質、焼土ブロック、炭化物多量、中粒砂多量、ロームブロック多量

第23号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	坏	13.9	(4.2)		BC2	A	B	25	柱穴内出土	稜部は沈線+荒削り
2	陶	10	(3.6)		B2	A	B	10	埋土	
3	陶	12.4	(6.9)		AB5	A	B	25	柱穴内出土	口縁部小さく外反
4	鉢	19.7	(8.4)		B2	A	B	10	埋土	口縁部外反
5	砥石	長8.3×巾2.2								

第54図 第24号住居跡(I)



第24号住居跡土層註

- 1 黒褐色シルト 粘性有、焼土ブロック微量、白色砂粒、パミス、ロームブロック少量
- 2 黒褐色シルト 粘性有、焼土ブロック微量、白色砂粒多量、パミス少量、ロームブロック少量
- 3 黒褐色シルト 粘土質、焼土ブロック微量、白色砂粒、パミス少量、ローム粒微量
- 4 黒褐色シルト 粘土質、焼土ブロック、炭化物少量、砂微量、ロームブロック微量
- 5 黒褐色シルト 粘性強、焼土ブロック微量、ロームブロック微量
- a 暗赤褐色シルト 砂質、焼土ブロック、炭化物微量、ロームブロック多量
- b 暗赤褐色シルト 天井崩落による焼土層
- c 灰黄褐色シルト 粘土質、焼土ブロック少量、ロームブロック微量
- d 灰黄褐色シルト 粘土質、焼土、炭化物多量、ロームブロック多量
- e 黒褐色シルト 粘性強、焼土少量、ロームブロック少量
- f 暗褐色シルト 砂質、焼土粒、焼土ブロック多量、ロームブロック少量

第24号住居跡柱穴土層註

- 1 黒褐色 粘性強、焼土少量、ローム、ローム粒少量
- 2 黒褐色 焼土粒多量、ローム、ローム粒、ロームブロック少量
- 3 黒褐色 焼土少量、炭化物、ローム、ローム粒多量
- 4 暗褐色 粘性強、焼土、焼土粒多量
- 5 暗黄褐色 ローム、ローム粒、ロームブロック多量

第24号住居跡 (第53、54図)

K3L16 グリッド付近は水田耕作土直下で遺構が検出されたが、平面形が明確に確認できたのは第24号住居跡カマドのみで、広範な黒褐色土の分布により住居跡群の存在が認識できる程度で、個々の住居跡について平面形等を確定することは困難である。

把握された新旧関係は、カマドの明確さから本住居跡が周辺部でもっとも新しく、さらに群を異にする第82号住居跡によって切られるという点のみで、重複する住居跡の軒数、平面形等の詳細は不明であった。

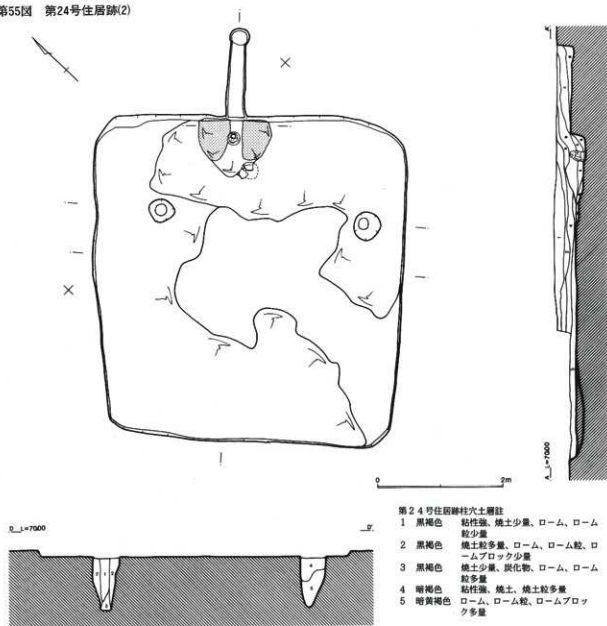
埋土の堆積状態は自然堆積を示す。埋土中からの出土遺物は比較的少量で、炭化物が中央部下層から出土している。

平面形は北西壁が若干歪むが略長方形で、5.28×5.00m、深さ35cm前後を測る。

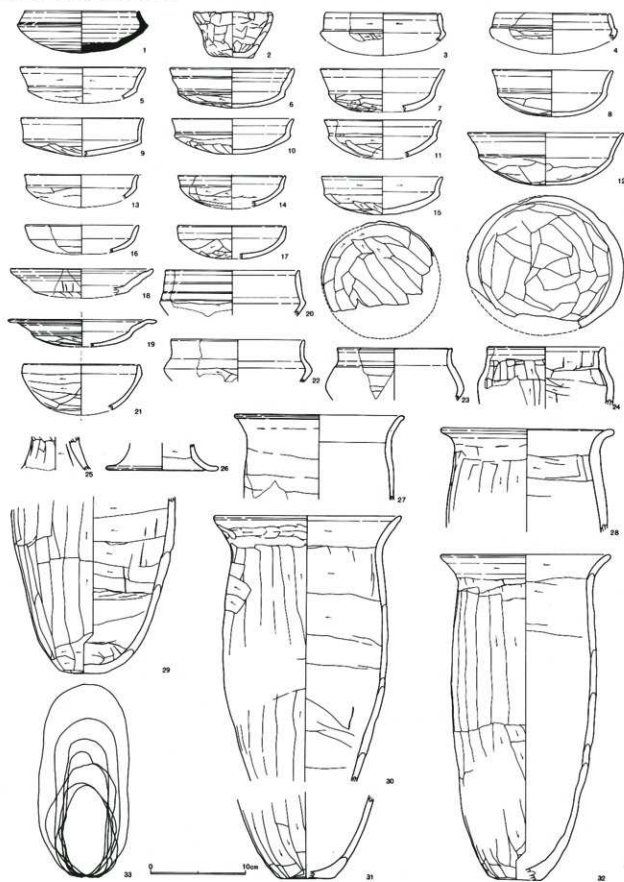
床はほぼ平坦、カマド付近で硬質面の広がりか検出されたが貼り床は存在しない。

主柱穴は2本で、間隔は3.25mを測る。2本ともに大形で深い。P1 ではほぼ中心部で、柱痕跡が検出された。

第55図 第24号住居跡(2)



第56图 第24号住居跡出土遺物



壁の大部分は浅く、わずかに斜行する。遺存状態が良好なカマド壁ではほぼ直立する。

壁構、貯蔵穴等の施設は検出されなかった。

床面直上からの遺物出土は少量で、カマド前面から北西壁中央部にかけて出土している。その他焼土が2地点に分布している。

掘り方は第40号住居跡との重複ではっきりしないが、中央部から南隅部分を掘り残し、壁下周辺部を掘り込む形態と考えられる。カマド壁下は他の部分よりも深く掘り込まれている。柱穴、壁構、カマド等との構築順序は把握できなかった。

カマドは北東壁中央部よりやや北寄りに設置され、煙出し口の焼土分布により容易に確認された。

燃焼部は箱形で、袖袋を含めると0.97×0.32mを測

る。底面からは、支脚転用と考えられる襷底部が伏せられた状態で、中心からやや左側に寄った位置から出土している。

煙道天井部が部分的に崩落せずに残存していた。

袖は上層を第24号住居跡によって切られるが下部は比較的よく残存している。出土遺物はほとんどない。焚き口部分は良く焼けており赤変硬化が顕著である。煙道部は比較的長く1.2×0.4mを測る。袖は暗褐色粘質土の貼付けによる。

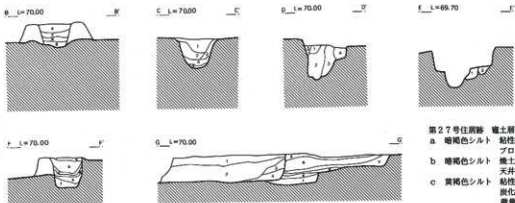
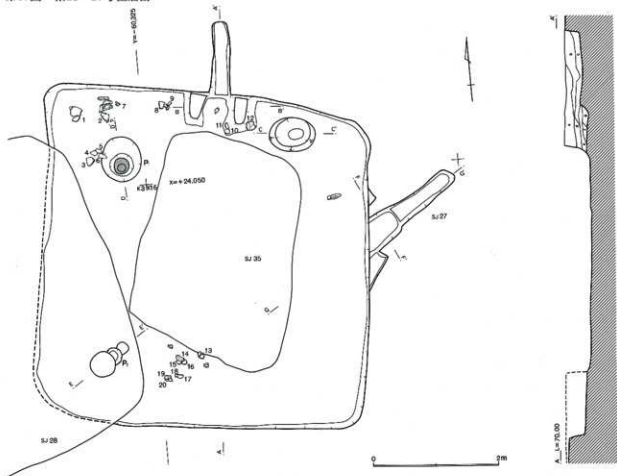
図示した以外の出土土器総破片点数は、1,867点である。環形土器534点、高環形土器5点、鉢形土器12点、壺形土器1点、甕形土器1,313点、不明1点である。

その他編物石が7個体と、貝穴状泥岩18個体(総重量71.75g)が出土している。

第24号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵環	12.1	4.4		D1	A	H	50	埋土	ロクロ左回転
2	小形鉢	8.1	4.8		AD1	A	B	80	埋土	輪積み底、底面木葉痕
3	環	12.3	(3.6)		BC1	A	F	10	埋土	後部はヨコナデ、棒状工具+寛削り
4	環	12.1	(2.7)		BC1	A	F	10	埋土	後部はヨコナデ、棒状工具+寛削り
5	環	13.2	(3.5)		A1	A	C	30	埋土	後部はヨコナデ+寛削り
6	環	13.1	4.2		AC1	A	A	20	埋土	段部は棒状工具による沈線
7	環	13.2	(4.5)		A1	A	C	30	埋土	段部ヨコナデ、後部ヨコナデ、工具+寛削り
8	環	12.6	4.9		A1	A	C	50	埋土	後部はヨコナデ、工具+寛削り
9	環	12.8	4.0		D2	A	B	30	埋土上層	砂質、後部はヨコナデ+寛削り
10	環	12.8	3.7		D1	A	B	25	埋土	砂質、後部はヨコナデ+寛削り
11	環	12.2	(4.1)		D1	A	B	20	埋土	内面黒色、後部はヨコナデ、工具+寛削り
12	環	16.6	5.5		A2	A	C	90	№6	後部はヨコナデ+寛削り、歪み顕著
13	環	12.0	(2.6)		A1	A	C	20	埋土上層	口縁部小さく外反、後部ヨコナデ+寛削り
14	環	11.5	(3.3)		A1	A	B	20	埋土	口縁部小さく外反、後部ヨコナデ+寛削り
15	環	12.6	4.0		A5	A	B	60	№1	器内厚く後部はヨコナデ+寛削り
16	環	12.0	(3.0)		A1	A	C	30	カマド	後部はヨコナデ、工具+寛削り
17	環	11.4	(3.5)		A2	A	B	30	埋土	口縁部小さく外反、後部ヨコナデ+寛削り
18	環	15.1	(2.8)		A1	A	B	10	埋土上層	段部棒状工具沈線、後部ヨコナデ+寛削り
19	皿	15.8	(2.9)		A2	A	B	25	埋土	口唇部外反、段部は棒状工具による沈線
20	環	14.0	(4.9)		A2	A	A	10	埋土上層	段部は棒状工具による沈線
21	環	12.2	(4.9)		D1	A	B	50	カマド	後部はヨコナデ+寛削り、二次加熱
22	碗	14.1	(4.5)		A1	A	B	10	埋土上層	口縁部外反、後部ヨコナデ、工具+寛削り
23	碗	12.1	(5.5)		D1	A	B	10	埋土上層	口唇部沈線
24	碗	12.3	(6.1)		BC2	A	F	20	埋土	口縁部小さく直立
25	高環		(2.9)		A1	A	C	10	埋土	小形の脚部
26	高環		(2.9)	11.9	A1	A	B	20	埋土	砂質、小形の脚部、内面寛削り
27	甕	17.7	(9.1)		D5	A	B	20	埋土	風化、摩滅顕著
28	甕	17.9	(10.9)		A5	A	B	30	埋土上層	口縁部小さく外反
29	甕底部		(18.7)	5.2	D4	A	B	90	埋土	外面縦割り
30	甕	19.5	(28.7)		A5	A	B	70	カマド、№13, 14, 16	口縁部大きく外反、縦割り
31	甕底部	(9.1)	6.3		AD4	A	B	25	床直	二次加熱? 底面木葉痕
32	甕	17.7	(34.5)		A4	A	B	70	カマド、№1, 3, 7	口縁部大きく外反、縦割り

第57図 第25・27号住居跡



- 第27号住居跡 電土層註
- a 暗褐色シルト 粘性強、炭化物少量、ロームブロック多量
 - b 暗褐色シルト 焼土粒、焼土ブロック大量、天井部
 - c 黄褐色シルト 粘性強、焼土ブロック多量、炭化物微量、ロームブロック微量
 - d 暗褐色シルト 焼土ブロック微量、ロームブロック微量
 - e 暗褐色シルト 焼土、焼土粒多量、炭化物少量
 - f 暗褐色シルト 炭化物微量、ローム、ローム粒少量

- 第25号住居跡柱穴土層註
- 1 黒褐色 焼土少量、炭化物少量、ローム、ローム粒、ロームブロック大量
 - 2 暗褐色 ローム、ローム粒、ロームブロック大量
 - 3 暗黄褐色 粘性強、ローム大量、ロームブロック大量
 - 4 黒褐色 粘性強、炭化物少量、ローム大量

- 第25号住居跡電土層註
- 1 暗褐色シルト 粘性有、焼土、焼土粒少量、炭化物少量、パミス、ローム、ローム粒少量
 - a 暗褐色シルト 粘性強、炭化物少量、ローム、ロームブロック少量
 - b 暗褐色シルト 砂質、焼土粒、焼土ブロック大量、天井部
 - c 暗褐色シルト 砂質、焼土、焼土ブロック多量、炭化物微量、ロームブロック微量
 - d 暗褐色シルト 砂質、焼土ブロック多量、炭化物微量、ローム粒少量
 - e 暗褐色シルト 焼土、焼土粒多量、炭化物少量
 - f 暗褐色シルト 炭化物多量、ローム、ローム粒少量

- 第25号住居跡貯蔵穴土層註
- 1 黒褐色 焼土、焼土粒少量、ローム、ローム粒少量
 - 2 黒褐色 焼土粒多量、ローム、ローム粒少量、ロームブロック多量
 - 3 黒褐色 焼土少量、ローム、ローム粒多量
 - 4 暗赤褐色 粘性強、焼土、焼土粒、焼土ブロック多量
 - 5 暗黄褐色 ローム、ローム粒、ロームブロック多量

第25号住居跡 (第57図)

K3K16 グリッド付近に位置し、第4住居跡群に属する。現水田耕作土直下の比較的浅い部分で検出された。

新旧関係は、第28、35、44号住居跡によって切られ、第26、45、46号住居跡を切る。

埋土の堆積状態は中央部を第35号住居跡によって切られるが、ほぼ自然堆積である。埋土中からの出土遺物は比較的少量である。

平面形は北壁がやや斜行するが略方形で、5.48×5.32m、深さ30cm前後を測る。主軸方位はN-5°-Eである。

床はほぼ平坦、貼り床は存在しない。

主柱穴は2本で、間隔は3.00mを測る。P1は大型で深く(0.62m)、中心からややずれて柱痕跡(径0.22m)が検出された。

壁は第28号住居跡と重複する部分以外はしっかりしており、ほぼ直立する。

貯蔵穴はカマド右側に設置され、略楕円形で0.73×0.53m、深さ46cmを測る。

床面直上からの遺物出土は少量で、カマド付近から西壁にかけての部分と、P2付近から出土しているがいずれも散在的である。

細物石がP1北側で集中的に出土している。

掘り方は存在しない。

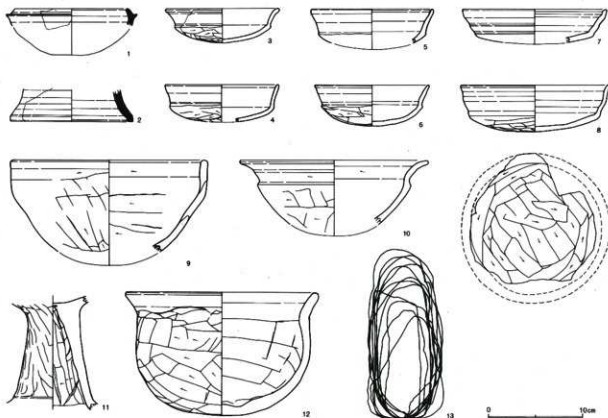
カマドは北壁にほぼ中央部に設置され、壁はカマド部分から東側で屈折度がついて、

燃焼部は箱形を呈し、0.62×0.46m、深さ40cm前後を測る。底面は比較的よく焼けており、ほぼ中央部から支脚石が出土している。煙道部へは段をなして移行する。

煙道部は、燃焼部軸線から東側にややずれて構築され、わずかに歪んでいる。底面はほぼ平坦で全体によく焼けていない。1.16×0.28mを測る。

袖部は比較的短く、灰褐色粘土によって構築される。

第58図 第25号住居跡出土遺物



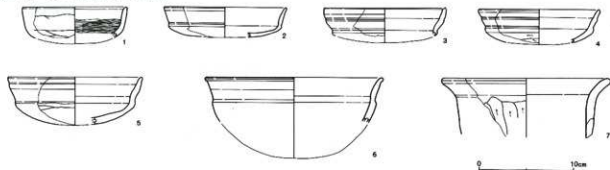
第25号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵環	12.0	(1.8)		F1	A	I	10	埋土	ロクロ右?回転
2	須恵脚部	13.0	(3.5)		F1	A	H	20	埋土	ロクロ左回転、器肉厚い
3	環	11.9	3.6		A2	A	A	20	埋土	口唇部肥厚、稜部ヨコナデ+笥削り
4	環	12.0	(3.9)		A1	A	C	30	埋土上層	口縁部外反、稜部はヨコナデ+笥削り
5	環	12.6	(3.6)		A1	A	C	30	埋土	口縁部受け口状、稜部はヨコナデ+笥削り
6	環	12.1	4.3		A1	A	C	40	No14	稜部はヨコナデ、棒状工具+笥削り
7	環	15.2	(3.5)		BC5	A	D	30	埋土	段部は工具ナデ
8	環	15.7	5.0		A2	A	E	40	No12	段部ヨコナデ、稜部ヨコナデ+笥削り
9	鉢	20.5	(9.7)		AC5	A	B	10	埋土	口縁部直立、外面縦笥削り
10	鉢	19.9	(6.8)		AC1	A	B	10	埋土	外面縦笥削り
11	高環		(12.1)		AD1	A	C	90	No8	長脚、内面笥削り
12	鉢	19.9	13.1	7.2	A2	A	E	50	埋土	口縁部外反器肉厚い

第27号住居跡 (第57回)

本住居跡は K3K15 グリッド付近に位置し第25号住居跡に切られる。主軸方位は N-56.5°-E である。カマドは東壁に設置される。燃焼部は箱形を呈し、現状

第59回 第27号住居跡出土遺物



第27号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	環	(11.0)	(3.0)		A1	A	E	20	カマド	内面~外面黒色処理、内面縦ミガキ
2	環	12.8	(3.2)		A1	A	C	20	カマド	二次加熱により一部灰色
3	環	(12.8)	(3.2)		C1	A	A	10	埋土	段部は工具ナデ?
4	環	(12.9)	(3.4)		C1	A	A	10	カマド	有段口縁環、段部は工具ナデ+棒状工具?
5	環	(14.0)	(5.1)		A1	A	E	20	カマド	内面受け口状、段部はヨコナデ?
6	環	19.0	(4.5)		A1	A	C	20	埋土	口唇部肥厚、稜部ヨコナデ+笥削り
7	甕	(17.8)	(6.3)		A5	A	B	10	埋土	口縁部小さく外反、器肉厚く外面縦笥削り

第26号住居跡 (第60回)

本住居跡は K3K15 グリッド付近に位置し、第4住居跡群に属する。

現水田耕作上直下の比較的浅い部分で、攪乱を受けているが比較的明瞭なカマド範囲として検出された。

新田関係は、第25、28号住居跡によって切られ、第64号住居跡を切る。

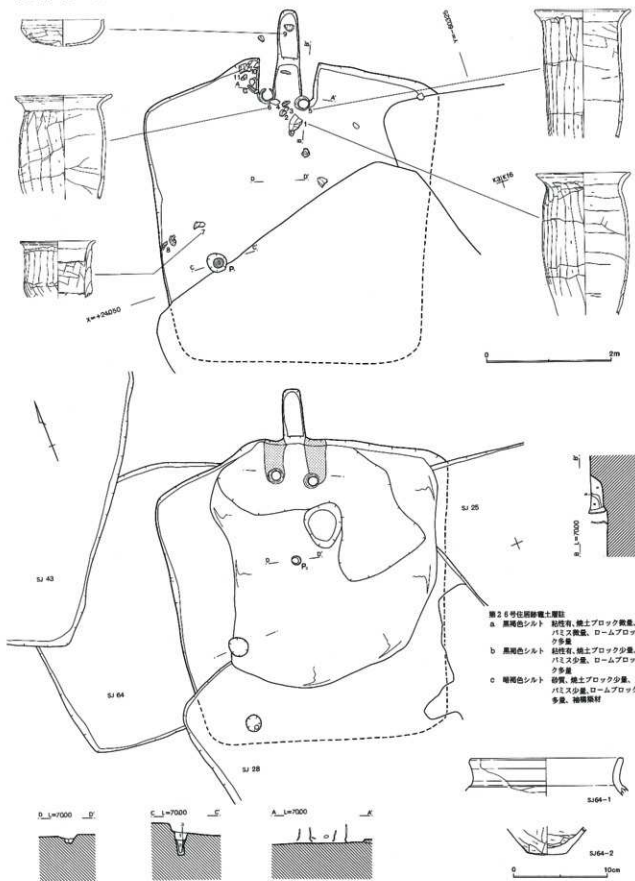
で 0.74×0.38m、深さ48cmを測る。底面はよく焼けている。煙道部へは段をなして移行する。煙道部は 1.14×0.27mを測る。緩く傾斜し全体に焼けていない。

埋土の堆積状態は、南西部分が重複による攪乱顕著であるが、ほぼ自然堆積とみなされる。埋土中からの出土遺物は比較的少量である。

平面形は北壁がカマド部分西側で大きく歪み、他の壁は重複により不明確であるが、略方形と推定される。(5.12×4.76m) 深さ20cm前後を測る。

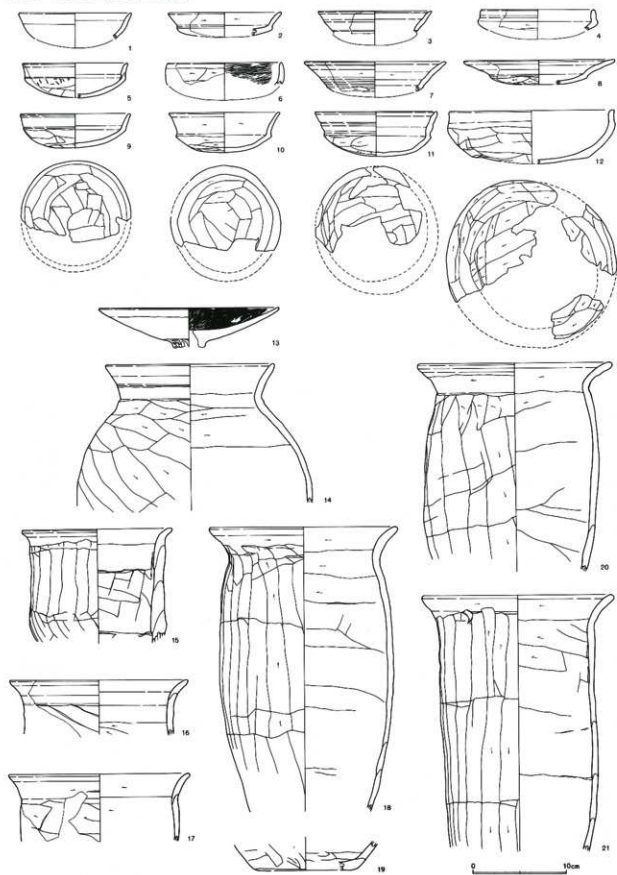
主軸方位は N-20.5°-E である。

第60図 第26号住居跡

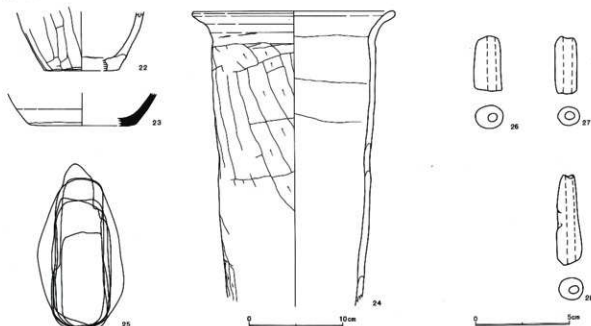


第26号住居跡出土層位
 a. 黒褐色シルト 粘存有、焼土ブロック少量、
 パミス少量、ロームブロック
 少量
 b. 黒褐色シルト 粘存有、焼土ブロック少量、
 パミス少量、ロームブロッ
 ク少量
 c. 暗褐色シルト 砂質、焼土ブロック少量、
 パミス少量、ロームブロッ
 少量、榎材

第61图 第26号住居跡出土遺物(1)



第62図 第26号住居跡出土遺物(2)



床は凹凸が顕著で、貼り床は存在しない。

主柱穴は小形のものが1本、西壁下から検出され、下層に柱痕跡が認められた。その他、掘り方中から小ビットが1本検出され、第28号住居跡掘り方中の小ビットも本住居跡に伴うと考えられる。全体に配置は整わない。残存する壁は、ほぼ直立する。

床面出土遺物はカマド付近及びその前面と、西壁中央部付近で、後者は少量である。

掘り方は、西壁下を掘り残し中央部分を掘り込む形態で、南壁下も掘り残した可能性がある。カマド右袖前方は土壌状に掘り込まれる。

カマドは北壁ほぼ中央部に設置され、両袖に長甕が

倒立状態で設置されている。燃焼部は箱形を呈し、 0.81×0.32 m、深さ25cm前後を測る。底面は比較的良好に焼けており、奥部から支脚石が出土している。煙道部へは段をなして移行する。煙道部はやや短く 0.73×0.32 mを測る。底面ほぼ平坦で全体によく焼けていない。先端部から環が出土している。袖部は灰褐色粘土及び黒褐色土を主体にして構築される。

図示した以外の出土土器総破片点数は、1,172点である。環形土器321点、高環形土器4点、甕形土器842点、支脚片5点である。

その他編物石が6個体と、貝巢穴泥岩6個体(総重量15.03g)が出土している。

第26号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	環	11.9	2.9		A1	A	A	20	埋土	口縁小さく外反
2	環	11.9	(2.5)		C1	A	E	10	埋土	口縁部小さく、鞍部ヨコナデ、工具+寛削り
3	環	12.0	(2.3)		C1	A	E	10	埋土	有段口縁環、段部は棒状工具?
4	環	11.9	(2.2)		AD2	A	E	10	埋土上層	口縁部小さく、鞍部ヨコナデ+寛削り
5	環	11.0	(3.6)		A1	A	B	20	埋土	口縁部片口? 鞍部はヨコナデ+寛削り
6	環	12.0	(2.4)		A1	A	B	10	埋土上層	内面黒色、鞍部はヨコナデ+寛削り
7	環	11.9	(2.2)		AD2	A	E	10	埋土	段部は棒状工具による沈線
8	環	12.0	(2.3)		AD2	A	B	10	埋土	段部ヨコナデ、鞍部ヨコナデ+寛削り
9	環	11.5	(2.7)		A2	A	C	70	埋土	二次加熱により内面灰色
10	環	11.6	(4.2)		A1	A	B	70	埋土	口唇部肥厚、鞍部ヨコナデ+寛削り
11	環	12.9	(4.7)		C1	A	F	50	埋土	段部は棒状工具による沈線
12	環	17.3	(5.6)		A5	A	A	40	埋土	器肉厚く鞍部はヨコナデ+寛削り

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
13	高 環	18.9	(4.3)		A1	A	B	25	埋土	内面黒色、ヘラミガキ
14	壺	17.7	(14.9)		A2	A	B	70	カマド	口縁部、頸部僅かに段をなす
15	甕	15.7	(12.1)		A5	A	B	30	No.7	器内厚く外面縦割り
16	甕	18.8	(5.9)		CD2	A	E	10	埋土	口縁部外反、頸部斜め寛削り
17	甕	19.0	(7.2)		C2	A	B	20	埋土	口縁部小さく外反、頸部僅かに段をなす
18	甕	19.6	(30.2)		A5	A	B	90	カマド左袖	胴部僅かに膨らむ、外面縦割り
19	甕底部		(3.1)	11.0	A5	A	B	40	埋土	やや大形
20	甕	14.9	(22.0)		AD2	A	C	90	カマド、No.3、6	加熱により内面灰色、口縁、頸部段をなす
21	甕		(3.4)	(11.4)	AD2	A	B	50	No.5	口縁外反、頸部縦割りによる段をなす
22	甕底部		(6.3)	8.1	A5	A	B	40	埋土上層	底面寛削り
23	須恵底部		(3.4)	11.4	F2	A	I	30	埋土	ロクロ右?回転
24	甕	20.9	(31.9)		CD2	A	B	60	カマド、No.10、12、13	口縁部外反、頸部僅かに屈曲、縦割り
26	土 鉢	長径(2.9)×最大径1.4×孔径0.5(cm)、重量4.9g								
27	土 鉢	長径(3.0)×最大径1.15×孔径0.5(cm)、重量3.3g								
28	土 鉢	長径(4.8)×最大径1.2×孔径0.5(cm)、重量3.3g								

第28号住居跡(第63、64図)

本住居跡はK3L15グリッド付近に位置し、第4住居跡群に属し、周辺部の住居跡のうちで最も新しい。

平面形は東、西壁が僅かに斜行するが方形で、規模は5.28×5.08m、深さ30cm前後を測る。

主軸方位はN-108°-Wである。カマド軸はN-96.5°-Wを示す。

床はほぼ平坦、カマド周辺部がよく踏み締まっている。貼り床は存在しない。

主柱穴は4本で整った配置をなし、P3はやや浅い。各主柱穴の間隔はP1P2が2.92m、P2P3が2.81m、P3P4が3.00m、P1P4が2.73mである。その他に掘り方中から小ビットが多数検出されたが、重複する住居跡に伴うものもある。中央部からやや東寄り直線状に並ぶ4本は本住居跡に伴うものと考えられる。

壁は、ほぼ直立する。壁溝はカマド部分以外全周する。

貯蔵穴は南東隅に位置し楕円形でさらにビット(径

0.54m)状に掘り込まれる。0.72×0.56m、深さ54cmを測る。床面出土遺物はカマド焼き口付近と、北西部P3付近で、後者は少量である。

掘り方は、カマド部分と中央部を掘り残り四周を掘り込む形態で、南壁下は深い。

カマドは西壁中央から南寄りに設置され、煙道は屈折する。両袖に長甕が設置されていたようである。

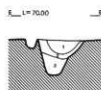
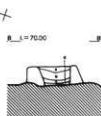
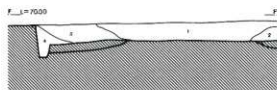
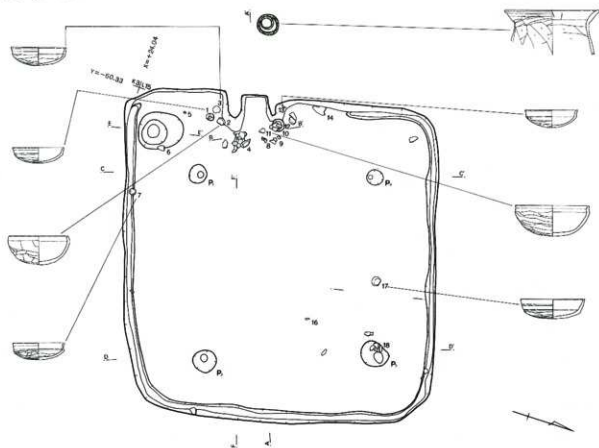
燃焼部は箱形を呈し、0.57×0.48m、深さ30cm前後を測る。底面はよく焼けており、煙道部へは僅かな段をなして移行する。煙道部は0.79×0.42mを測り、底面ほぼ平坦で全体によく焼けていない。煙出し口から長甕が倒立状態で出土している。袖部は僅かに地山を掘り残り、灰褐色粘土及び黒褐色土を被覆して構築される。

図示した以外の出土土器総破片点数は、730点である。環形土器158点、高環脚部1点、変形土器571点である。その他編物石が7個体と、貝塚穴泥岩2個体(総重量5.13g)が出土している。

第28号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵蓋	11.0	(2.5)		D1	A	H	10	壁溝	口縁部小さく外反
2	須恵高環		(2.3)	11.1	F2	A	I	25	埋土	ロクロ右?回転
3	須恵蓋	19.0	(2.1)		D1	A	H	20	No.16	ロクロ左回転
4	環	13.2	(3.2)		A1	A	E	10	埋土	口縁部外反、腰部ヨコナデ+寛削り
5	環	11.0	3.7		A1	A	B	25	No.13	口縁部小さく外反、腰部ヨコナデ+寛削り
6	環	13.9	(2.7)		A1	A	B	10	貯蔵穴	腰部はヨコナデ、工具+寛削り
7	環	11.7	3.9		A1	A	B	99	No.3	口縁部小さく外反、腰部ヨコナデ+寛削り

第63図 第28号住居跡(1)

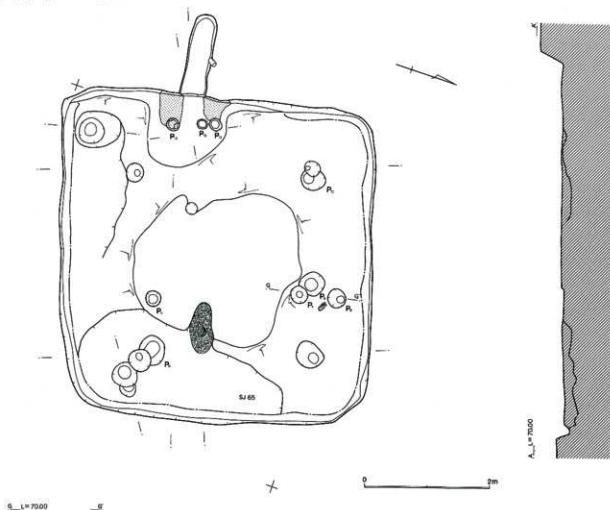


第28号住居跡土層註

- 1 褐色シルト 粘性有、焼土ブロック少量、
パミス多量、ロームブロック多量
- 2 褐色シルト 粘性有、焼土ブロック微量、
パミス多量、礫少量、ロームブ
ロック多量
- 3 灰褐色シルト 焼土ブロック少量、ロームブ
ロック微量
- 4 黒褐色シルト 粘性有、焼土ブロック微量、
パミス少量、円礫微量、ローム
粒多量、ロームブロック多量
- a 黒褐色シルト 焼土ブロック少量、ローム粒、
ロームブロック多量
- b 褐色シルト 焼土粒、焼土ブロック多量、
天井部の崩落
- c 褐色シルト 粘性有、焼土粒、焼土ブロッ
ク多量、炭化物少量
- d 暗褐色シルト 粘性有、焼土ブロック微量、
炭化物多量

0 2m

第64図 第28・65号住居跡



尺 1/1000



野塚穴土層註

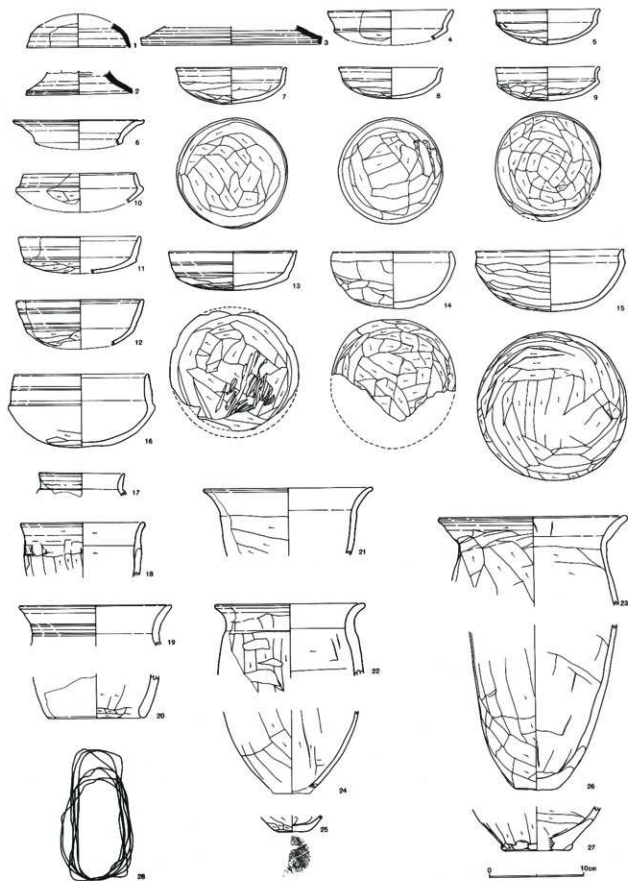
- 1 暗褐色シルト 粘性有、焼土ブロック少量、ロームブロック少量
- 2 暗褐色シルト 粘性有、焼土ブロック少量、ロームブロック微量
- 3 暗褐色シルト 粘性有、焼土ブロック微量、ロームブロック微量

柱穴土層註

- 1 黒褐色シルト 粘性有、焼土ブロック微量、バミス多量、ロームブロック多量
- 2 黒褐色シルト 粘性有、焼土ブロック少量、バミス少量、ロームブロック多量

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
8	坏	10.8	3.3		A1	A	B	100	No.1	口縁部小さく外反、稜部ヨコナデ+寛削り
9	坏	11.0	3.6		A1	A	B	95	No.7	口唇部肥厚、稜部ヨコナデ+寛削り
10	坏	11.8	(3.2)		C1	A	E	10		稜部はヨコナデ、工具+寛削り
11	坏	12.8	(3.7)		AC1	A	B	20	床下	役部は棒状工具による沈線
12	坏	13.2	(4.8)		A1	A	B	25	埋土	役部は工具ナデ
13	坏	13.5	(4.1)		C1	A	B	90	No.17	役部棒状工具沈線、稜部ヨコナデ+寛削り
14	坏	12.5	6.1		D5	A	B	60	No.2	二次加熱で変色、稜部ヨコナデ+寛削り
15	坏	15.6	6.5		AC1	A	B	95	No.11	口縁部小さく外反、稜部ヨコナデ+寛削り
16	坏	14.2	7.8		AC1	A	E	40	埋土	内外面黒斑、役部は棒状工具による沈線?
17	椀	9.1	(2.4)		A1	A	C	20	埋土	口縁部肥厚しほ直立
18	小形甕	13.0	(5.7)		AD2	A	B	30	No.1	口縁部小さく外反、外面縦削り
19	壺	15.9	(4.3)		C2	A	D	10	埋土	口唇部沈線、役部は棒状工具ナデ
20	甕		(4.8)	10.1	AE5	A	B	10	床下	大形単孔

第65図 第28号住居跡出土遺物



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
21	甕	22.2	(9.3)	8.0	AC2	A	B	10	No.6	口縁外反、頸部横篔割り
22	小形甕	16.0	(7.0)		AE5	A	B	10	床下	口縁部外反、外面縦篔割り
23	甕	19.5	(9.5)		AD2	A	B	80	カマド燻出し部	口縁部外反、外面縦斜め篔割りによる段
24	甕胴部		(8.7)	3.9	AD5	A	B	70	カマド	小形の底部、外面縦篔割り
25	甕底部		(1.7)	3.0	AC1	A	B	50	No.4	底面本業痕
26	甕		(17.5)	4.5	AD5	A	B	80	カマド、No.17	底部厚く、外面一定方向の篔割り
27	甕底部		(4.7)	7.3	AD5	A	B	50	貯蔵穴	底部周縁粘土貼付け

第65号住居跡 (第64図)

K3L15グリッド付近に位置し、第4住居跡群に属する。

本住居跡は、第28号住居跡掘り方中で検出されたもので、同住居跡によってほとんど破壊されている。

平面形は不明確であるが方形か。規模は現在長3.40×1.50mを測る。主軸方位はN-89.5°-Wである。

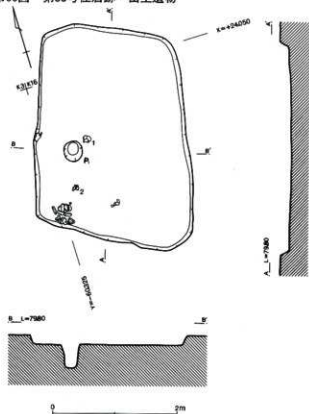
柱穴は、第28号住居跡P2周辺に存在する2本が伴うと考えられる。

第35号住居跡 (第66図)

K3K16グリッド付近に位置し、第4住居跡群に属する。

新旧関係は第26号住居跡を切り完全に入れ子状と

第66図 第35号住居跡・出土遺物



なる。カマドが存在せず竪穴状遺構としたほうが妥当かも知れない。

埋土はほぼ黒褐色土の単一土層である。

平面形は西、南壁が斜行し全体に歪むか略長方形で、3.44×2.68m、深さ15cmを測る。主軸方位はN-22°-Eである。

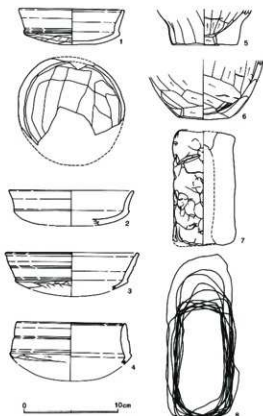
床は第25号住居跡埋土中に存在しほぼ平坦。

主柱穴は大形のものが1本、東壁下南よりに存在する。

壁は全体にやや斜行する。

床面直上出土遺物は少量である。編物石が南東隅で集中的に出土している。

カマド、掘り方は存在しない。



第35号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	環	11.2	3.9		A1	A	C	70	埋土	段部はヨコナテ、棒状工具+笥削り
2	環	13.0	(3.7)		A1	A	E	30	埋土	稜部ヨコナテ+笥削り
3	環	13.8	(3.9)		C1	A	A	25	埋土	段部工具ナテ、稜部棒状工具+笥削り
4	環	11.4	(4.4)		C1	B	A	25	埋土	段部棒状工具、稜部棒状工具+笥削り
5	甕底部		(3.9)	6.9	AD2	A	A	70	カマド	底面笥削り
6	甕底部		(6.4)	5.5	AD2	A	C	50	Na4	小杉単孔、底面笥削り
7	土製支脚			(5.8)	D2	A	B	80	Na5	円柱状、指頭及び工具ナテ

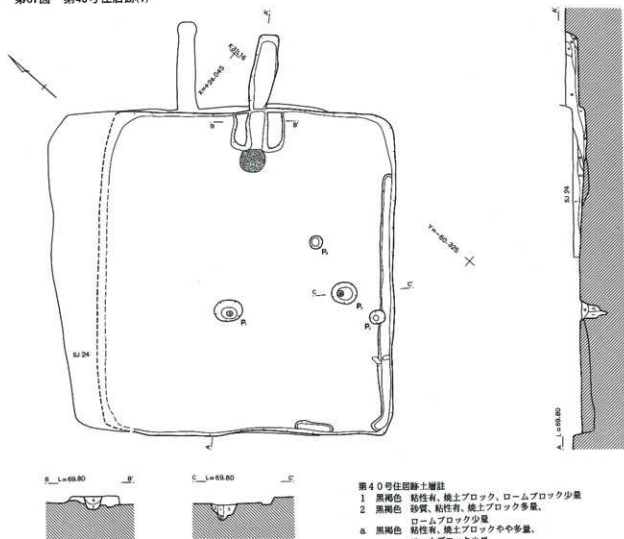
第40号住居跡 (第67、68図)

住居跡の下層に存在し、第30、45、46、158、159号住

本住居跡は、K3L16グリッド付近に位置し、第24号

居跡を切る。

第67図 第40号住居跡(1)



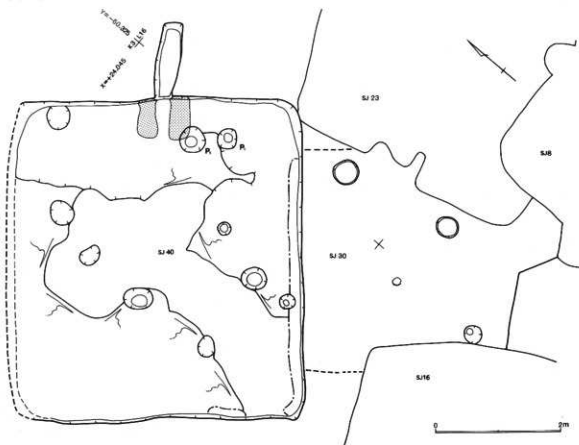
第40号住居跡土層註

- 1 黒褐色 粘性有、焼土ブロック、ロームブロック少量
- 2 黒褐色 砂質、粘性有、焼土ブロック多量、ロームブロック少量
- a 黒褐色 粘性有、焼土ブロックやや多量、ロームブロック少量
- b 黒褐色 粘性有、焼土ブロックやや多量、ロームブロック少量
- c 黒褐色 砂質、焼土ブロック多量、ロームブロック少量
- d 黒褐色 砂質、焼土ブロック多量、炭化物少量
- e 黒褐色 粘性有、焼土多量、ローム粒、ロームブロック大量
- f 赤褐色 粘性有、焼土多量、炭化物微量、ロームブロック少量
- g 黄褐色 砂質、粘性有、焼土ブロック、ロームブロック微量

柱穴土層註

- 1 黒褐色 粘性有、焼土ブロック、炭化物粒微量、ロームブロック少量
- 2 黒褐色 粘性強、ロームブロック多量、バミヤや多量
- 3 黒褐色 粘性有、焼土ブロック少量、ロームブロックやや多量
- 4 黒褐色 粘性有、焼土ブロック微量、炭化物微量

第68図 第30号住居跡・40号住居跡(2)



平面形は第24号住居跡とはほぼ重なり不明確であるが略長方形、5.32×4.72m、深さ15cmを測る。

主軸方位はN-56°-Wである。

床面は大部分が第24号住居跡掘り方と重複しており、不明確である。

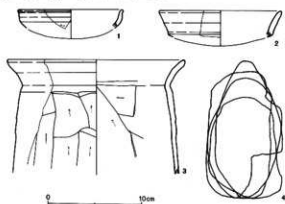
壁はわずかに残り、ほぼ直立する。

主柱穴は2本で配置は整わない。柱穴間隔はP1P3が1.80m、P3P4が0.92mを測る。他に壁溝のやや内側に小ピットP2が存在する。さらに掘り方中から小ピットが検出された。貯蔵穴は存在しない。壁溝は南東、南西壁の一部に存在する。

カマドは北東壁ほぼ中央部に設置され、裾部上層は第24号住居跡によって削平されるが、灰褐色粘土貼付

けの基底部が僅かに残存する。燃焼部は箱形と考えられ0.68×0.32m、深さ30cm前後を測る。焚き口の赤変硬化は顕著。煙道部へ段をなして移行する。煙道部の規模は1.19×0.42mを測る。

第69図 第40号住居跡出土遺物



第40号住居跡出土遺物観察表

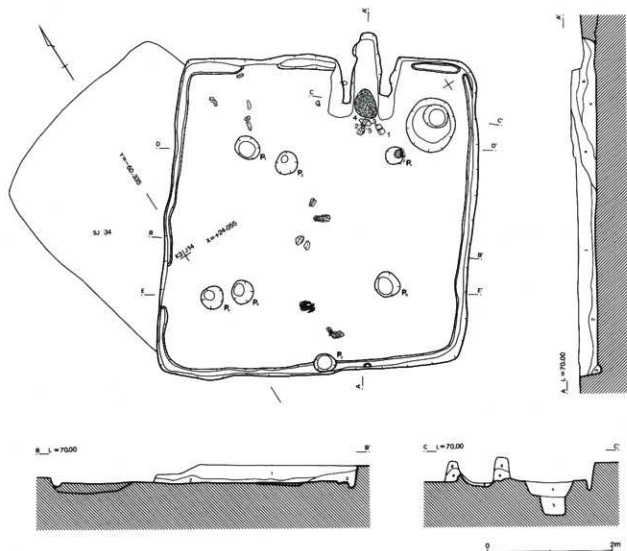
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	環	10.9	(2.0)		A1	B	B	10	埋土	口唇部肥厚、裾部ヨコナデ+筒削り
2	環	12.9	(2.7)		D2	B	A	10	埋土	風化孝減顕著、段部ヨコナデ
3	甕	18.7	(12.1)		D5	B	B	20	カマド	口縁外反、頸部屈曲、外面縦削削り

第43号住居跡 (第70、71図)

本住居跡付近から南側は第24号住居跡付近まで黒褐色土が広く分布し、各住居跡範囲を確定することは困難を極めた。本住居跡については、カマド軸の粘土分布によって存在が確認され、住居跡範囲としては南西壁が検出できたのみである。確認段階で把握された新旧関係は、第31、34号住居跡によって切られ、第64号住居跡を切っている。埋土は自然堆積と考えられるが、第34号住居跡の掘り方は断面では明瞭ではなかつ

た。全体の遺物出土量は多くはないが、ほとんどが埋土中から出土している。中央部の石、炭化材も埋土中からの出土である。平面形は南西壁がやや斜行するが、略方形で5.36×5.04m、深さ30cm前後を測り、主軸方向はN-35°-Wである。床はほぼ平坦で、硬質面は特に認められなかった。北隅部床面直上から細礫石が出土している。主柱穴は4本 (P1、P4、P6、P7) で1本は浅い。他に副柱的な2本が検出されている。貯蔵穴は東隅部に位置し、略円形で径0.84m、底部はさ

第70図 第43号住居跡(1)

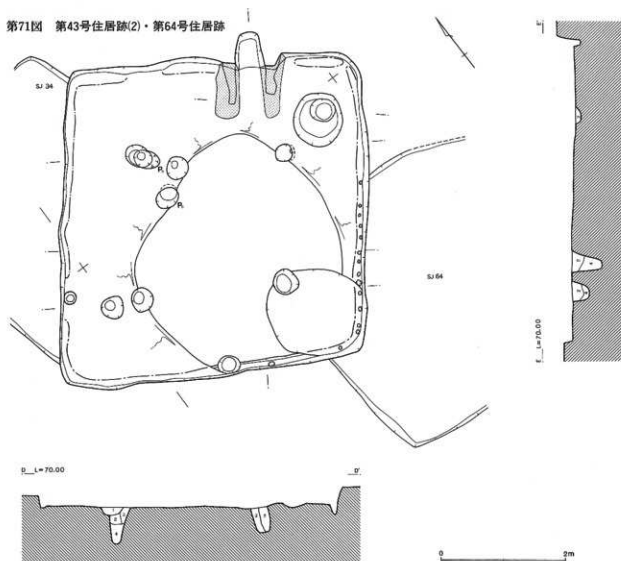


第43号住居跡土層註

- 1 暗褐色 焼土少量、ローム、ローム粒、ロームブロック多量
- 2 暗褐色 炭化物、炭化粒少量、ローム、ローム粒多量
- 3 暗茶褐色 焼土、炭化物少量、ローム、ローム粒少量
- 4 黒褐色 焼土粒多量、ローム粒、ロームブロック多量
- 5 黒色 焼土、炭化物少量

- a 暗褐色 焼土、焼土粒多量、焼土ブロック多量、炭化物少量 (天井部)
- b 暗灰褐色 灰褐色粘土多量、焼土、焼土粒多量
- c 暗赤褐色 焼土大量
- d 暗褐色 焼土、焼土粒少量、ローム、ローム粒少量
- e 暗褐色 硬質、焼土、焼土粒少量、ローム、ローム粒大量

第71図 第43号住居跡(2)・第64号住居跡



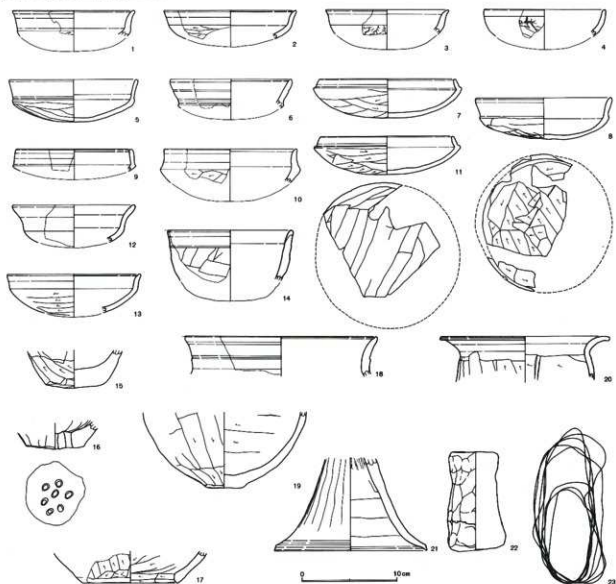
らに深さ30cm前後掘り込まれ、径0.36mの円形をなす。壁の遺存状態は比較的良好で、深さ30cm前後掘り込まれる。壁溝は竈部分以外を回り、部分的に途切れる。南西壁下(ほぼ中央部にやや浅いピットが配置される。掘り方は周辺部を掘り込み(ほぼ中央部を掘り残す形である。東壁下壁溝中に15~20cm間隔で小ピットが十数カ所検出された。竈は北東壁中央部からやや南側

に設置され、遺存状態は良好である。燃焼部は箱形で0.65×0.50m、焚き口の赤変硬化が顕著である。燵破片が出土している。煙道部への移行は平坦で壁から0.6m程凸出し、上層部は第31号住居跡竈によって切られる。袖は掘り方埋め戻し後の構築で、地山を芯材とし暗褐色粘質土を被覆する。

第43号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	環	(12.8)	(2.8)		AD1	A	B	10	埋土	口唇肥厚、稜部ヨコナテ+匱削り
2	環	(14.0)	(30.1)		AD1	A	A	20	埋土	口唇沈線、稜部ヨコナテ+匱削り
3	環	(12.9)	(2.7)		AD1	A	B	10	カマド	稜部ヨコナテ(未調整残る)+匱削り
4	環	(12.8)	(2.9)		AD1	A	B	10	埋土	稜部ヨコナテ(未調整残る)+匱削り
5	環	13.4	4.5		A1	A	C	60	No 6	稜部ヨコナテ、棒状工具+匱削り
6	環	(12.7)	(3.1)		AD1	B	A	10	埋土	段部棒状工具沈線、稜部ヨコナテ+匱削り
7	環	14.1	4.1		AD2	A	A	30	埋土	稜部ヨコナテ、棒状工具+匱削り

第72図 第43号住居跡出土遺物



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
8	坏	14.3	4.3		A1	A	B	40	埋土	黒斑、稜部ヨコナテ+寛割り
9	坏	(12.3)	(2.4)		AD1	A	A	10	埋土	口縁部内傾、稜部ヨコナテ+寛割り
10	坏	(14.0)	(3.0)		AE2	B	B	10	埋土	器内厚い、稜部ヨコナテ+寛割り
11	坏	13.9	4.0		AD1	A	A	40	埋土	器内厚い、稜部ヨコナテ、棒状工具+寛割り
12	坏	(12.8)	(3.9)		AE2	A	D	10	埋土	口縁大きく外反、稜部ヨコナテ+寛割り
13	坏	(14.0)	(4.3)		C1	A	F	25	埋土	口唇部沈陥、稜部ヨコナテ+寛割り
14	碗	(13.1)	(5.3)		A5	A	B	20	埋土	器内厚い、稜部ヨコナテ+寛割り
15	甕底部		(3.9)	6.1	E2	A	E	80	埋土	器内厚い、底面寛ナテ
16	甕底部		(2.8)	5.6	D2	A	B	80	Na 1	7孔、器内厚い
17	甕底部		(3.3)	(10.3)	A5	A	B	10	カマド	単孔、胴部縦寛割り、内面指頭ナテ
18	壺口縁部	(20.2)	(4.3)		AD1	A	B	10	埋土	外面工具ナテ、段部は棒状工具による沈陥
19	甕底部		(8.0)	4.1	E4	A	B	20	カマド	胴部縦寛割り、底面寛ナテ
20	壺口縁部	(17.5)	(4.5)		E5	A	B	25	Na 2	内面黒斑、頸部僅かに屈曲、外面縦寛割り
21	高環脚部		(9.7)	(16.1)	A1	B	C	30	カマド	長脚、外面寛ナテ、内面寛割り
22	土製支脚		10.5	5.5	AD2	A	B	90	カマド	円柱状、外面指頭ナテ

第64号住居跡 (第60図)

本住居跡はK3L15グリッド付近に位置し、第4住居跡群に属する。第26、43号住居跡によって切られる。

埋土は黒褐色土のほぼ単一土層である。遺物は全て埋土中の出土である。

平面形は重複顕著で不明確であるが方形、規模は4.05×4.00m、深さ10cm前後を測る。

主軸方位はN-4.5°-Wである。

床は凹凸がある。貼り床は存在しない。

柱穴等の施設は検出できなかった。

カマドは北壁に設置されていたものと考えられる。

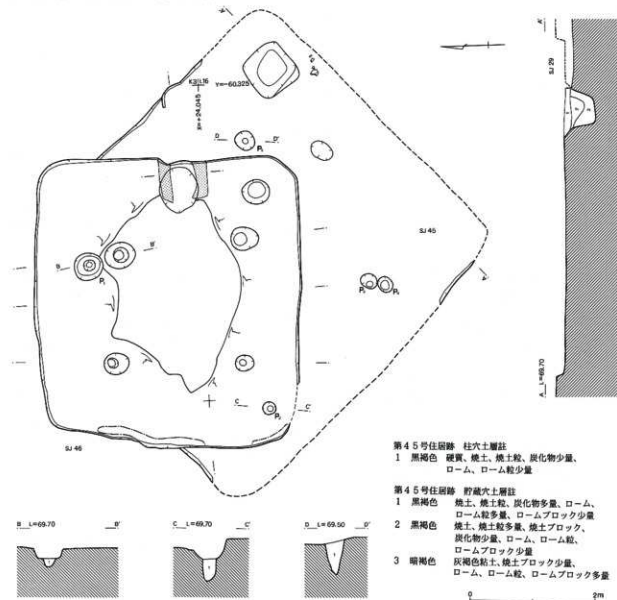
第45号住居跡 (第73図)

第11号住居跡及び周辺部 Grid 下げ段階で、北東壁が部分的に検出され、第17号住居跡床面直上で中央部から北より黒色土の落ち込み(本住居跡南東壁東半部)が検出された。他の壁はさらに住居跡が重複しているため確認されていない。

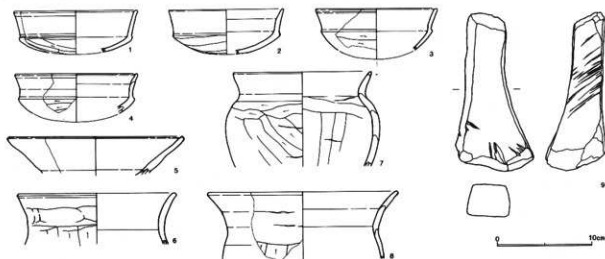
確認段階で把握された新旧関係は、第17、22、23、44号住居跡によって切られ、第29号住居跡を切る。

埋土が北東壁部分に僅かに残っていた。南東壁(第17号住居跡床面上で確認)残存埋土はごく少量である。いずれも堆積状態を把握できるほどではない。

第73図 第45号住居跡・46号住居跡(1)



第74図 第45号住居跡出土遺物



第45号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	環	(13.0)	(4.7)		A1	A	B	20	貯藏穴	口縁外反稜部ヨコナデ、棒状工具+寛削り
2	環	12.2	(4.8)		A1	A	B	20	埋土	器肉厚い、稜部はヨコナデ+寛削り
3	環	(13.0)	(5.2)		A1	A	B	10	貯藏穴	口縁外反、稜部はヨコナデ+寛削り
4	環	(13.0)	(5.1)		Cl	A	E	10	埋土	口縁外反内面肥厚稜部はヨコナデ+寛削り
5	高環	(19.0)	(4.2)		A1	A	B	10	貯藏穴	口唇尖る
6	小形甕	15.0	(10.0)		A1	A	B	50	床下	内外面黒斑、外面縦寛削り、二次加熱?
7	甕	(20.4)	(7.2)		D1	B	B	40	埋土	口唇尖る、外面横寛削り、二次加熱
8	砥石	長径17.5×巾4.2~8.5(cm)								

第46号住居跡 (第72、74図)

K3L16 グリッド付近は現耕作土直下に於て住居跡の存在ことは把握できたが、平面形、甕等は全くとらえることができなかった。グリッド下げの結果、住居跡の重複が少なくとも2~3軒存在することが判った。第45号住居跡西壁際に略円形の焼土分布が認められ、煙出し口と考えられた。同住居跡内側で竈袖崩壊粘土が検出され、重複する第24、40号住居跡竈撤去後には範囲確定された。南壁については不明瞭で推定部分が大きい。

確認段階で把握された新旧関係は、第17、24、25、28、35、40号住居跡によって切られ、第45号住居跡を切る。

埋土はほとんど残存しておらず、上述の住居跡が本住居跡を掘り込んだ痕跡も確認できるほどではなく、堆積状態は不明瞭である。

平面形はカマド対壁が若干歪むが略長方形、4.64×4.24mを測る。主軸方位はN-90°-Wである。

床硬質面はなく全体に柔らかく、ほぼ平坦である。壁は残存部分ではほぼ直立する。壁溝がカマド対壁~南西隅に部分的に検出されている。

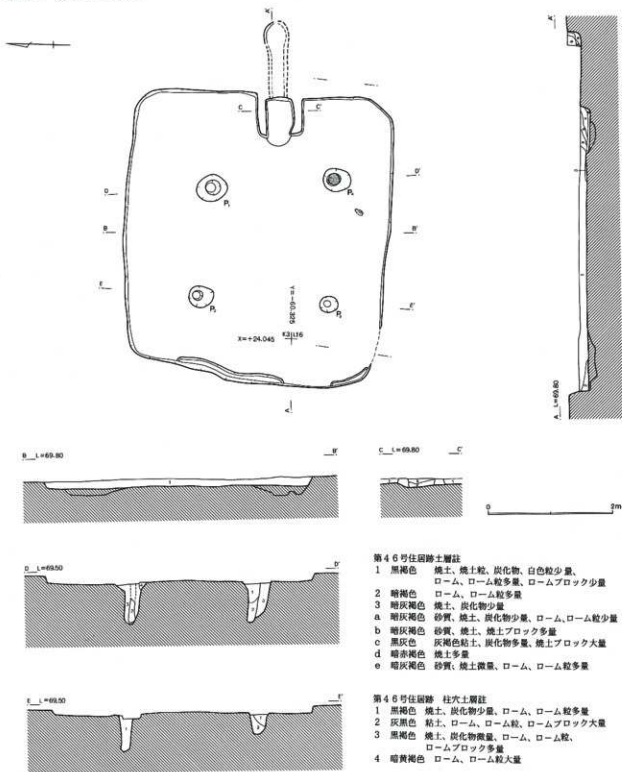
主柱穴は4本で、P4(P1で一部)では柱痕跡が検出された。整った配置である。

貯藏穴状の略円形の掘り込みがカマド右側、掘り方中から検出されている。0.38×0.45mを測る。若干の土器片が出土している。

掘り方は中央部を掘り残し、四周を掘り隅部がさらに凹む形である。

カマドは東壁や南寄りに設置され、粘土貼付けの袖部が僅かに残存していた。燃焼部は箱形を呈し、煙道部へは段をなして移行していたと考えられる。

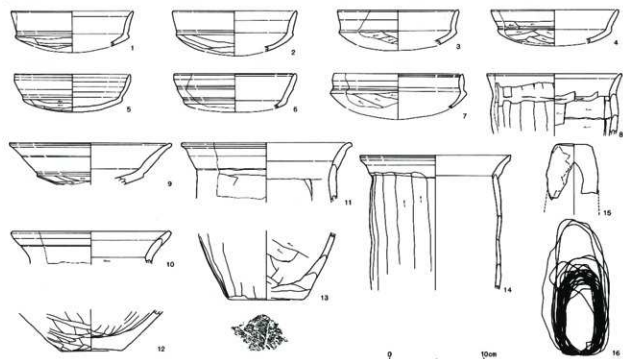
第75図 第46号住居跡(2)



第46号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	環	13.0	(4.5)		A1	B	C	25	埋土	口縁外反、稜部はヨコナデ+寛ケズリ
2	環	13.2	(4.8)		A1	B	B	25	埋土	口縁外反、稜部ヨコナデ、工具+寛ケズリ
3	環	(13.0)	(4.3)		A1	A	B	10	埋土	口縁外反、稜部工具ナデ+寛ケズリ

第76図 第46号住居跡出土遺物



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
4	環	(13.6)	(4.6)		AC2	A	A	25	埋土	口縁外反、稜部工具ナテ+笥ケズリ
5	環	12.2	(4.1)		CD2	A	E	20	埋土	ヨコナテ有段、稜部棒状工具+笥ケズリ
6	環	(12.8)	(4.2)		CD2	A	C	10	埋土	洗線有段、稜部は棒状工具+笥ケズリ
7	環	(13.6)	(4.0)		AD1	A	B	20	埋土	稜部はヨコナテ、棒状工具+笥ケズリ
8	小形甕	(13.1)	(6.6)		AD5	B	B	20	埋土	外面縦割り
9	高環	17.0	(4.6)		AC1	A	C	25	埋土	ヨコナテ有段、稜部は棒状工具+笥ケズリ
10	甕口縁部	(16.6)	(3.6)		B2	A	A	10	埋土	外面洗線
11	甕口縁部	(17.8)	(6.4)		E5	B	C	10	埋土	外面縦割りによる段
12	壺底部		(4.5)	6.5	D5	A	A	70	埋土	底面一定方向の縦割り
13	甕底部		(7.4)	7.8	A5	A	B	25	埋土	底面木葉痕
14	甕	16.0	(14.4)		A4	B	C	20	埋土	口縁外反、頸部縦割りによる段
15	土製支脚	3.4	(6.1)		A1	B	B	50	埋土	円柱状、中実

第79号住居跡 (第184図)

本住居跡は K3L15 グリッド付近に位置し、第4住居跡群に属する。

第28、159号住居跡によって住居跡の大部分を切られ、かろうじて残存するのは北西壁～西隅部分のみで、詳細は不明である。

第158号住居跡 (第77図)

本住居跡は K3L15 グリッド付近に位置し、第4住居跡群に属する。第16、30、40号住居跡によって大部分を切られ、残存するのは西壁～北西隅部分のみであ

る。主軸方位は N-30°-W である。

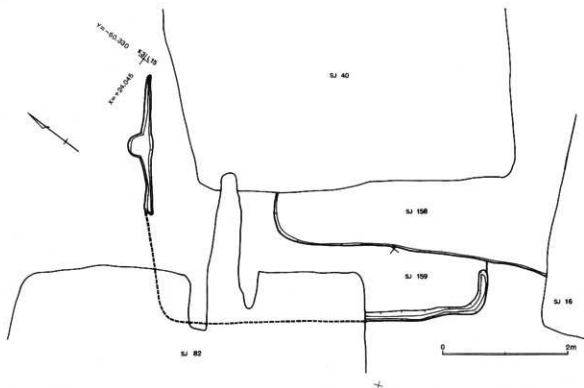
規模は現在長4.44×0.77m、深さ5cm前後と浅い。

第159号住居跡 (第77図)

本住居跡は K3L15 グリッド付近に位置し、第4住居跡群に属する。第28、40、82、158号住居跡によって大部分を切られ、西壁と北壁部分が残存する。主軸方位は N-39.5°-W である。

規模は現在長5.46×4.10m、深さ5cm前後を測る。

埋土中に多量の炭化物、焼土を含む。図示できる出土遺物はない。



5. 第5住居跡群

第31号住居跡 (第79図)

本住居跡はK3J15グリッド付近に位置する。

第5住居跡群は散開状を呈するが、本住居跡は同住居跡群の南側に位置する。南側の第4住居跡群の主体とはやや距離を置いている。

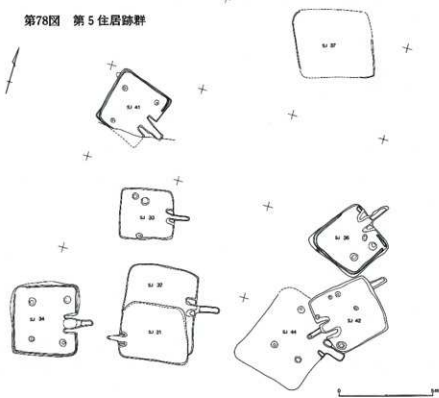
新旧関係は、本住居跡が第43、32号住居跡を切る。

平面形は西、南壁以外は不明確であったが台形状乃至長方形で、規模は3.76×3.07m、深さ17cmを測る。

主軸方位はN-100°-Wを測る。

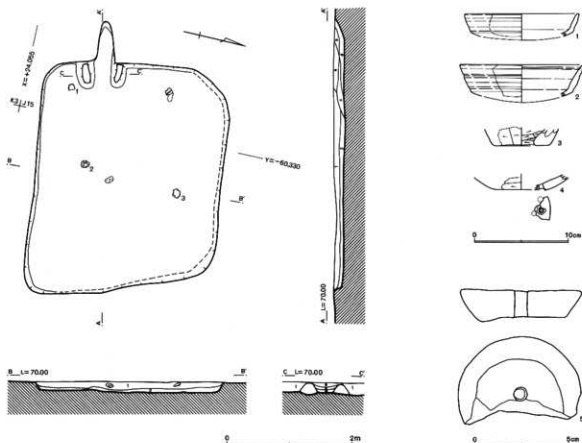
床は全体に柔らかく、地山直上に構築される。貼り床は存在しない。壁は南、西壁がやや傾斜する。壁溝、柱穴、貯蔵穴等は検出されなかった。

第78図 第5住居跡群



カマドは西壁の南寄りに設置される。燃焼部底面はほぼ平坦で、焚き口付近が比較的良く焼けている。規模は0.44×0.40m、深さ0.15mを測る。燃焼部と煙道部の境界は不明瞭である。煙道先端部は幅狭い。規模

第79図 第31号住居跡(1)



第31号住居跡

- 1 暗褐色 ローム、ローム粒少量、焼土、焼土粒少量、炭化物粒少量、白色粒少量
 2 暗褐色 ローム、ローム粒少量、焼土、焼土粒少量、炭化物粒少量、白色粒少量、灰褐色粘土少量

- a 暗褐色 灰褐色粘土少量、焼土、焼土粒多量
 b 暗灰褐色 灰褐色粘土多量、焼土少、炭化物少量、ローム少量
 c 暗灰褐色 灰褐色粘土多量、焼土、焼土ブロック多量、炭化物少量
 d 暗褐色 灰褐色粘土少量、焼土、焼土ブロック、炭化物多量

は0.66×0.30mを測る。袖部は暗灰褐色粘土を主体にして構築される。カマド壁はほとんど掘り込まれない。

出土遺物は少量で、全て埋土中の出土である。出土第31号住居跡出土遺物観察表

遺物の総破片点数は256点である。環形土器が84点、変形土器が172点である。図示した以外に貝果穴痕泥岩1個体(0.74g)がある。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	環	(12.0)	(2.4)		A1	A	C	10	埋土	摩滅顯著
2	環	(13.1)	(3.3)		D1	A	B	10	埋土	摩滅顯著
3	瓶		(2.0)	(6.0)	A2	A	F	10	埋土	多孔か?
4	瓶		(1.6)	(5.6)	D2	A	A	10	埋土	多孔
5	土製紡錘車	上径6.5×下径4.5×孔径0.8×厚さ1.7(cm)、重量49g								

第32号住居跡(第80図)

本住居跡はK3115グリッド付近に位置する。

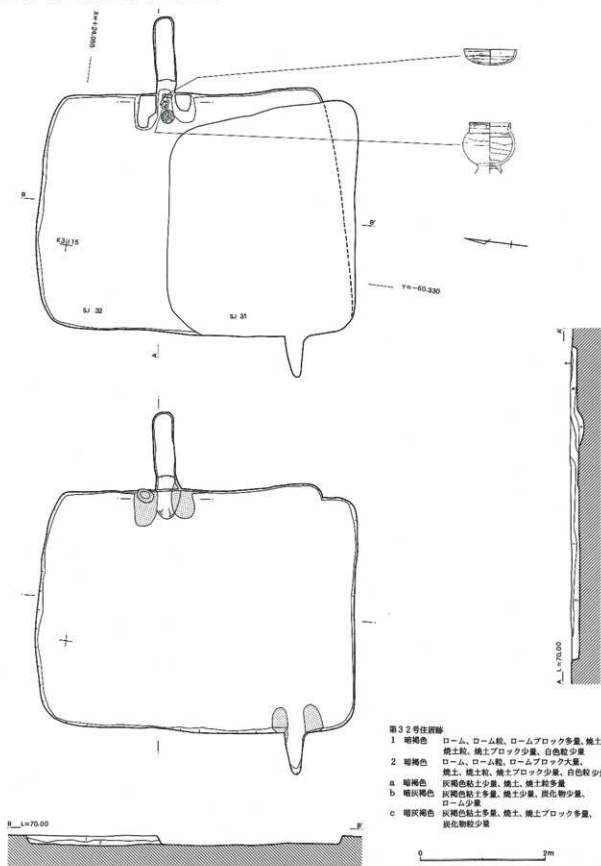
第33、34、44号住居跡に囲まれ、3m前後の距離を置く。新田岡係については本住居跡が第43号住居跡カマド部分を切り、第31号住居跡によって南半部を切り西壁を共有する。

平面形は南北方向に長軸をもつ長方形。規模は5.03×3.92m、深さ15cmを測る。

主軸方位はN-81°-Eを測る。

床は不明瞭で全体に柔らかく、第31号住居跡床面とはほぼ同一面をなす。地山直上に構築され、貼り床、掘り方は存在しない。

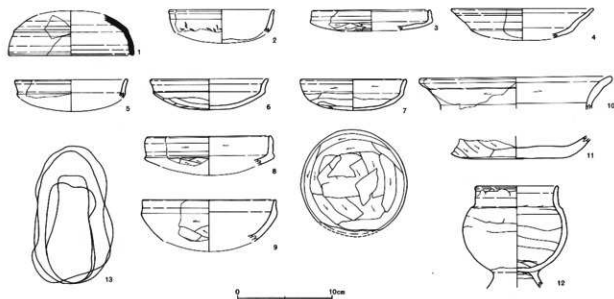
第80図 第31号住居跡(2)・第32号住居跡



第32号住居跡

- 1 暗褐色 ローム、ローム粒、ロームブロック多量、焼土、
焼土粒、焼土ブロック少量、白色粒少量
- 2 暗褐色 ローム、ローム粒、ロームブロック大量、
焼土、焼土粒、焼土ブロック少量、白色粒少量
- a 暗褐色 灰褐色粘土少量、焼土、焼土粒多量
- b 暗灰褐色 灰褐色粘土多量、焼土少量、炭化物少量、
ローム少量
- c 暗灰褐色 灰褐色粘土多量、焼土、焼土ブロック多量、
炭化物粒少量

第81図 第32号住居跡出土遺物



壁は残存する部分ではやや傾斜する。壁溝、柱穴、貯蔵穴は存在しない。

カマドは東壁やや北寄りに設置される。燃焼部底面はやや掘り込まれ、焚き口部分が良く焼けている。規模は0.80×0.36m、深さ0.21mを測る。燃焼部奥壁から緩い段をなして煙道部へ移行する。煙道部底面は壁外に向かって緩く立ち上がる。規模は0.86×0.36mを第32号住居跡出土遺物観察表

測る。袖部は暗灰褐色粘土を主体にして構築される。カマド壁は掘り込まれず、明瞭な掘り方は存在しないが、左袖下部は楕円形状のピット(径27×20cm)が掘り込まれる。

環形土器の主体は小形で口縁部外反するものである。須恵器蓋は混入。その他細物石が4個体、貝果穴凝泥岩が5個体(重量7.58g)出土している。

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵蓋	13.3	(4.4)		D1	A	H	10	埋土	ロクロ左?回転
2	坏	11.1	(2.3)		A1	A	C	20	カマド	稜部はヨコナデ、未調整部分残
3	坏	13.1	(2.1)		A1	A	B	10	埋土	稜部はヨコナデ+寛削り
4	坏	14.9	(3.1)		A2	A	C	10	カマド	段部ヨコナデ、稜部ヨコナデ+寛削り
5	坏	11.9	(1.9)		D1	A	B	20	Na 5	砂質、稜部はヨコナデ+寛削り
6	坏	12.3	3.2		C1	A	B	30	Na 5	稜部はヨコナデ+寛削り
7	坏	11.2	3.3		D1	A	A	90	Na 2	口縁部小さく外傾、稜部ヨコナデ+寛削り
8	坏	13.1	(3.1)		C1	A	E	10	掘り方	口縁部直立、稜部ヨコナデ、工具+寛削り
9	坏	14.1	(4.4)		A1	A	B	10	Na 5	口縁部小さく直立、稜部ヨコナデ+寛削り
10	甕	20.2	(3.5)		D2	A	E	20	カマド	頸部まで縦削り
11	底部		(2.4)	5.2	E4	A	B	70	Na 3	底面寛削り
12	小形台付甕	8.7	(10.8)		A4	A	C	90	Na 4	風化摩滅顕著、器壁薄。

第33号住居跡(第82図)

本住居跡はK3H15グリッド付近に位置する。

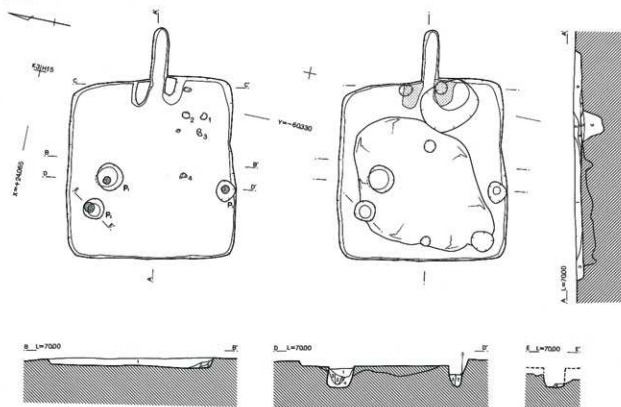
第32号住居跡と第42号住居跡のほぼ中間に存在し、第1号掘立柱建物跡を切って本住居跡カマドが構築されている。

平面形はカマド壁がやや歪む長方形で、規模は2.92×2.70m、深さ10cmを測る。

主軸方位はN-82°-Eを測る。

床は不明瞭で全体に柔らかい。掘り方は四周を掘り残し、中央部を楕円形状に掘り込む。貼り床は存在し

第82図 第33号住居跡



柱穴土層註

- 1 黒褐色シルト 粘性強、ローム粒、ロームブロック多量
- 2 黒褐色砂質シルト 粘性強、焼土ブロック、炭化物やや多量、ロームブロック微量
- 3 黒褐色シルト 粘性有、炭化物少量、パミス微量
- 4 黒褐色シルト 粘性有、ロームブロック少量

第33号住居土層註

- 1 黒褐色シルト 粘性強、焼土ブロック少量、パミス微量、ロームブロック微量
- 2 黒褐色シルト 粘性強、パミス微量、ローム粒子やや多量、ロームブロック微量
- 3 黒褐色シルト 粘性有、焼土粒微量、パミス微量、ローム粒子やや多量、ロームブロック微量
- 4 暗褐色シルト 粘性有、パミス微量、ロームブロックやや多量
- 5 黒褐色シルト 粘性有、焼土ブロック、炭化物少量、パミス微量、ロームブロック少量
- 6 黒褐色シルト 粘性有、焼土微量、ロームブロックやや多量
- a 黒褐色シルト 粘性強、焼土ブロック少量
- b 暗褐色砂質シルト 粘性有、焼土粒微量、ロームブロック少量
- c 灰褐色砂質シルト 粘性有、焼土ブロックやや多量、炭化物少量、パミス微量、ロームブロック少量

ない。出土遺物は主にカマド右袖付近に分布する。

柱穴は3本で、いずれも柱痕跡が検出されている。P1は大形で径40cm、深さ35cm、P2は径34cm、深さ30cm、P3は径30cm、深さ32cmを測る。柱穴間隔はP1P2が0.51m、P2P3が2.18m、P1P3が1.89mを測る。柱穴配置はP1P3がカマド軸に直交する。掘り方内でカマド軸方向に小ビットが2カ所検出されている。

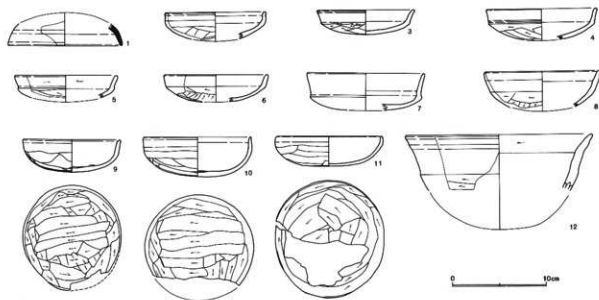
壁はやや傾斜する。壁溝、貯蔵穴は存在しない。

カマドは東壁はほぼ中央部に設置される。カマド壁はカマド部分で僅かに段をなす。燃焼部底面はやや掘り

込まれ、それ程焼けていない。規模は0.52×0.27m、深さ0.18mを測る。燃焼部から煙道部へはそのまま移行し、煙道部底面はほぼ平坦。規模は0.76×0.23mを測る。袖部は灰褐色粘土を主体にして構築される。カマド壁は掘り込まれず、両袖下部は径20cm程の円形ビットが掘り込まれる。

出土遺物の総点数は99点と少量で、そのうち環形土器片が32点、高環形土器片が1点、甕形土器片が66点である。環形土器の主体は小形の口縁部が外反するもので、少量の口縁部が小さく直立するものが混じる。

第83図 第33号住居跡出土遺物



第33号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵蓋	12.0	(2.3)		D1	A	I	10	埋土	ロクロ左?回転
2	坏	10.6	(2.9)		A1	B	A	25	埋土	口唇部肥厚、稜部ヨコナテ+寛削り
3	坏	10.2	2.6		C1	A	B	30	No 3	口唇部肥厚、稜部ヨコナテ+寛削り
4	坏	11.6	(3.3)		C1	A	B	50	床直	稜部ヨコナテ、工具+寛削り
5	坏	10.8	(2.4)		A1	A	B	20	埋土	外面黒斑、稜部ヨコナテ、工具+寛削り
6	坏	11.0	(2.8)		A1	A	B	20	埋土	体部薄い、稜部ヨコナテ+寛削り
7	坏	12.4	(4.0)		A1	A	B	20	No 4	口縁部外面鋭痕跡
8	坏	12.1	(3.8)		AC1	A	E	20	埋土	稜部はヨコナテ+寛削り
9	坏	10.3	(3.5)		A1	A	A	90	No 2	外面黒斑、稜部はヨコナテ+寛削り
10	坏	11.4	4.2		A1	A	A	80	No 1	黒斑、稜部はヨコナテ+寛削り
11	坏	11.1	3.2		CD1	A	B	80	No 4	黒斑、口縁部肥厚、稜部ヨコナテ+寛削り
12	鉢	19.6	(6.0)		C2	A	A	10	埋土	口縁部肥厚、段部ヨコナテ

第34号住居跡 (第84図)

本住居跡はK3J14グリッド付近に位置する。

第31、32号住居跡の西側、第5住居跡群の南西端部に存在する。新旧関係は本住居跡が第43号住居跡を切って構築されている。

平面形は方形で、規模は3.98×3.74m、深さ20cmを測る。主軸方位はN-77°-Eを測る。

床は北半部は地山直上に構築され、貼り床は存在しない。南半部は対角線状に掘り方が存在し、掘り方埋め戻し土の直上に床面が構築され、やはり貼り床は存在しない。

柱穴は4本で、P2から柱痕跡が検出されている。P1

は径38cm、深さ9cm、P2は径42cm、深さ50cm、P3は径30cm、深さ50cm、P4は径35cm、深さ8cmを測る。

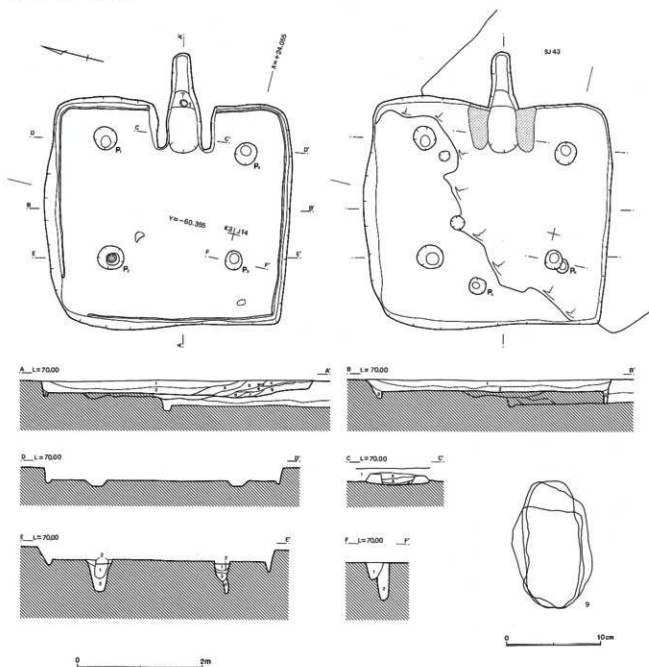
柱穴間隔はP1P2が1.87m、P2P3が1.95m、P1P3が1.73m、P3P4が2.27mを測る。

柱穴配置はほぼ方形に配置されP1、P4がカマド両軸軸に接近する。掘り方内で小ピットが4カ所検出されている。P5はカマド対壁のほぼ中間にある。

壁はやや傾斜する。壁溝がカマド部分及び北西隅を除いて設置される。貯蔵穴は存在しない。

カマドは東壁僅かに南よりに設置される。燃焼部底面はやや掘り込まれ、比較的良く焼けている。規模は0.98×0.52m、深さ0.26mを測る。燃焼部から煙道部

第84図 第34号住居跡



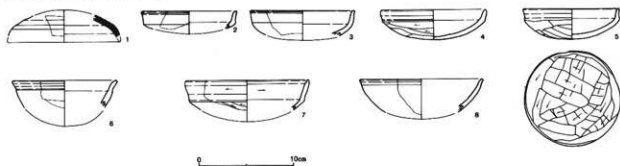
第34号住居跡土層註

- | | | |
|---|------|----------------------------|
| 1 | 暗褐色 | 焼土少量、ローム、ローム粒子多量、ロームブロック多量 |
| 2 | 暗褐色 | 炭化物、炭化粒少量、ローム、ローム粒子多量 |
| 3 | 暗茶褐色 | 焼土、炭化物少量、ローム、ローム粒子少量 |
| a | 暗褐色 | 焼土、焼土粒多量、灰土ブロック大量、炭化物少量 |
| b | 暗灰褐色 | 焼土、焼土粒子多量、灰褐色粘土多量 |
| c | 黒褐色 | 焼土、焼土粒少量、ローム、ローム粒子少量 |
| d | 黒灰色 | 焼土、焼土粒大量、炭化物多量、灰褐色粘土 |
| e | 暗赤褐色 | 焼土大量 |
| f | 暗褐色 | 硬質、焼土、焼土粒少量、ローム、ローム粒子大量 |

柱穴土層註

- | | | |
|---|-----|--------------------------|
| 1 | 黒褐色 | 焼土粒、炭化物粒微量、ロームブロック少量 |
| 2 | 暗褐色 | 粘性強、焼土、バミスやや多量、ロームブロック多量 |
| 3 | 黒褐色 | 焼土ブロック、炭化物少量、ロームブロックやや多量 |
| 4 | 黒褐色 | 粘性有、焼土、焼土ブロック微量、炭化物微量 |

第85図 第34号住居跡出土遺物



へ緩い段をなし移行する。煙道部はやや短く、底面は緩く立ち上がる。規模は0.61×0.34mを測る。袖部は灰褐色粘土を主体にして構築される。カマド壁は掘り込まれない。

第34号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵 壺	(11.9)	(2.9)		D1	A	I	10	埋土	ロクロ石?回転
2	環	(10.1)	(1.9)		C1	A	F	10	埋土	口唇部肥厚、内外面黒色処理
3	環	(11.1)	(2.7)		A1	A	B	20	埋土	口唇肥厚、黒斑、後部ヨコナデ+寛削り
4	環	11.0	3.2		D1	A	B	30	埋土	口縁肥厚、後部ヨコナデ+寛削り、黒斑
5	環	10.2	3.2		D1	A	C	100	No.1	後部ヨコナデ、工具+寛削り
6	環	(10.9)	(2.9)		A1	A	A	10	埋土	有段口縁環、後部ヨコナデ
7	環	(13.1)	(3.2)		A2	A	B	10	埋土	内面黒色、後部ヨコナデ
8	環	(13.1)	(3.5)		C1	B	A	10	埋土	口縁部小さく外反、後部ヨコナデ+寛削り

出土遺物の総点数は99点と少量で、そのうち環彩土器片が32点、高環彩土器片が1点、甕彩土器片が66点である。環彩土器のうち小形で口縁部が小さく外反するものが特徴的である。

第36号住居跡 (第86図)

本住居跡はK3I17グリッド付近に位置する。

第42、44号住居跡と共に第5住居跡群の南東端部に存在する。本住居跡は第42号住居跡と極く僅かな間隔を保っており、かろうじて重複していない。

平面形はカマド対壁が斜行する台形状乃至方形で、規模は3.36×3.24m、深さ30cmを測る。主軸方位はN-35°-Eを測る。

床は掘り方埋め戻し土の直上に構築され、貼り床は存在しない。ほぼ壁溝部分を除き、四周に沿ったやや内側から中央部にかけて掘り方が存在し、掘り込みは深い。

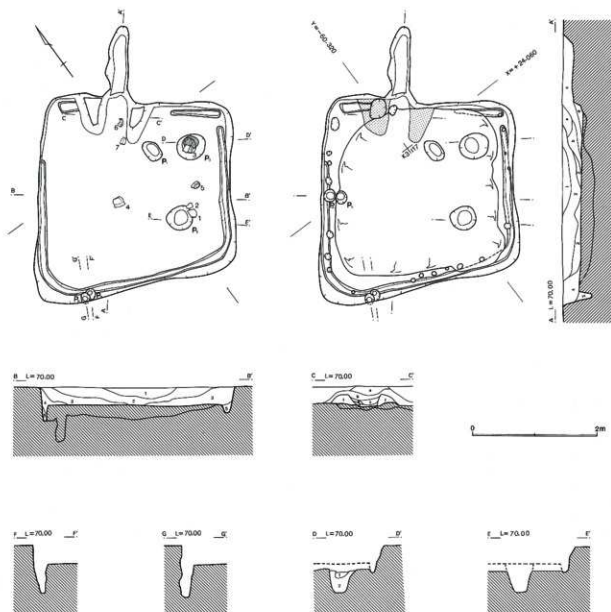
柱穴は2本で、P1は位置的にカマドに伴う施設と考えられる。P3から浅い柱底跡が検出されている。P1は径39cm、深さ46cm、P2は径42cm、深さ47cm、P3は径35cm、深さ20cmを測る。柱穴間隔はP1P2が1.18m、

掘り方内ビットとの距離はP2P6が1.95m、P1P6が2.28mを測る。柱穴配置は直線乃至三角形。南東壁々溝中にビットは殆ど検出されなかったが、その対壁及び南西壁々溝中から一部壁溝からずれるが、多数の小ビットが検出されている。

壁はやや傾斜するが掘り込みはしっかりしている。壁溝はカマド部分及び北、東隅を除いて設置される。貯蔵穴は存在しない。

カマドは北東壁の北隅寄りに設置され、カマド壁はカマド部分で僅かに段をなす。燃焼部底面はやや掘り込まれ、比較的良く焼けている。規模は0.76×0.51m、深さ0.34mを測る。燃焼部奥壁から煙道部へは段をなして移行する。煙道部底面はほぼ平坦で、規模は1.06×0.35mを測る。袖部は灰褐色粘土を主体にして構築される。カマド壁は掘り込まれず、左袖は壁溝上に構築されている。

第86図 第36号住居跡

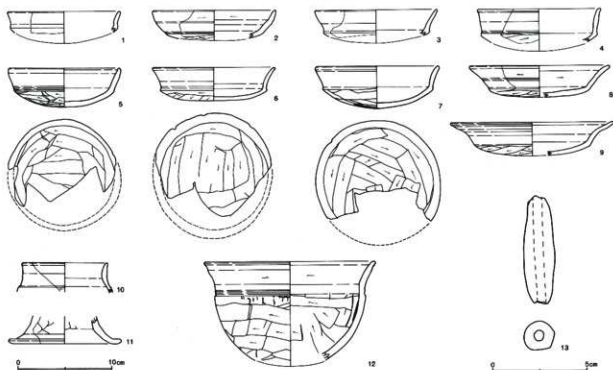


第36号住居跡土層註

- 1 黒褐色シルト 粘性有、焼土ブロック少量、パミス微量、小礫微量、ロームブロック微量
- 2 黒褐色シルト 粘性有、焼土粒微量、炭化物、パミス微量、ロームブロックやや多量
- 3 黒褐色シルト 粘性有、焼土ブロック、炭化物微量、パミス微量
- 4 棕褐色シルト 粘性有、焼土ブロックやや多量、炭化物大量、パミス微量、ロームブロック微量
- 5 黒褐色シルト 粘性有、焼土粒微量、パミス微量、ロームブロック微量
- a 暗褐色シルト 粘性有、焼土、炭化物微量、パミス微量、ロームブロック微量
- b 黒褐色砂質シルト 粘性有、炭化物微量、パミス微量、ロームブロック少量

- c 黒褐色砂質シルト 粘性有、焼土微量、パミス微量、ロームブロックやや多量
 - d 黒褐色砂質シルト 粘性有、焼土粒、焼土ブロック多量、パミス少量、(天井部崩落)
 - e 黒褐色シルト 粘性有、焼土ブロック微量、パミス微量、ロームブロック微量
- 柱穴土層註
- 1 黒褐色砂質シルト 粘性有、焼土ブロックやや多量、パミス微量、ロームブロック少量
 - 2 褐色シルト 粘性有、焼土、炭化物微量、パミス微量、ロームブロック微量

第87図 第36号住居跡出土遺物



第36号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	環	12.0	(2.3)		AD1	A	B	10		口縁部小さく外反、稜部ヨコナデ+寛削り
2	環	12.9	(2.9)		D1	B	F	10	埋土	段部横ナデ、稜部ヨコナデ+寛削り
3	環	12.9	(2.7)		A1	A	C	10	埋土	口縁部外反、稜部ヨコナデ、工具+寛削り
4	環	12.9	(3.5)		AD1	A	E	10	埋土	砂質、口唇肥厚、稜部ヨコナデ+寛削り
5	環	11.8	4.1		A1	A	E	60	埋土	段部ヨコナデ、稜部棒状工具+寛削り
6	環	13.0	3.5		A1	A	C	60	Na 5	稜部ヨコナデ+寛削り
7	環	13.0	4.7		A1	A	E	80	Na 5	稜部ヨコナデ、棒状工具+寛削り
8	環	14.7	(3.3)		A1	A	A	10	カマド	段部工具ナデ、稜部工具ナデ+寛削り
9	環	17.4	3.5		AE5	B	D	30	Na 7	段部ヨコナデ、稜部ヨコナデ+寛削り
10	碗	9.1	(3.1)		A1	A	C	10	カマド	口縁部厚、稜部ヨコナデ+寛削り
11	高環脚部		(2.9)	12.0	A1	A	B	10	埋土	内面寛削り
12	環	18.1	(10.4)		AE5	B	D		Na 7	内面段部ヨコナデ、稜部ヨコナデ+寛削り
13	土 鏝	長さ(5.7)×最大径1.5×孔径0.5(cm)、重量11.7g								

第37号住居跡 (第88図)

本住居跡は K3G16 グリッド付近に位置する。

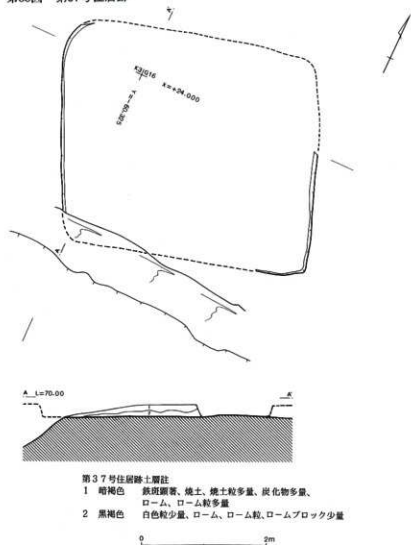
条里坪境界区画溝の北側にあり同溝による撓乱顕

第37号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵高環		(7.5)		D1	A	G	70	埋土	ロクロ左? 回転、漕かし3方、2段
2	環	(10.8)	(2.2)		A1	A	E	20	埋土	口縁部小さく外反、稜部ヨコナデ+寛削り
3	環	(11.9)	(2.7)		A1	A	C	10	埋土	段部ヨコナデ、稜部ヨコナデ+寛削り
4	環	(12.0)	(2.5)		AC1	A	E	10	埋土	口縁部小さく直立、稜部ヨコナデ+寛削り

著。第5住居跡群の北東端部に存在し現状では単独で存在するが、周辺部から比較的多量の遺物が出土しており、周辺にも住居跡が存在していたことが想定され

第88図 第37号住居跡



第37号住居跡土層註

- 1 暗褐色 鉄斑顯著、焼土、焼土粒多量、炭化物多量、ローム、ローム粒多量
- 2 黒褐色 白色粒少量、ローム、ローム粒、ロームブロック少量

0 2m

る。

平面形は略長方形で、規模は現状で4.20×3.82m、深さ18cmを測る。長軸方位はN-71°-Eを測る。

床は地山直上に構築され、貼り床、掘り方は存在しない。

柱穴、壁溝、貯蔵穴等は存在しない。カマドは不明である。

出土遺物は攪乱顯著にもかかわらず比較的多数出土した。

第41住居跡 (第90図)

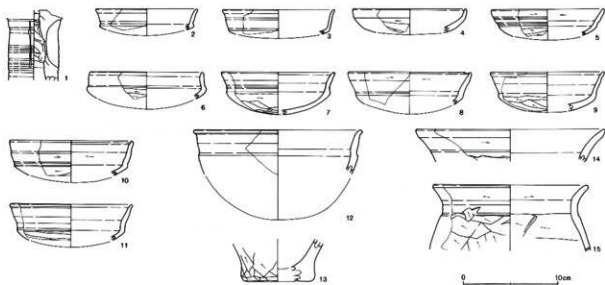
今井川越田遺跡の古墳時代集落のほぼ北限に位置する住居跡である。

水田耕作土直下での遺物の出土により遺構の存在が確認された。周辺部分は比較的広範囲にわたって黒色土が分布する。

現農業用水路 (第4号溝跡) が交差する部分で葦の根による攪乱が顯著である。

大略北半部のみ残存し、南北方向に長軸を持つ黒褐色土の略方形の範囲である。隅部は曲線ではなく、直

第89図 第37号住居跡出土遺物



第37号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵高環		(7.5)		D1	A	G	70	埋土	ロクロ左?同転、透かし3方、2段
2	環	(10.8)	(2.2)		A1	A	E	20	埋土	口縁部小さく外反、稜部ヨコナデ+寛削り
3	環	(11.9)	(2.7)		A1	A	C	10	埋土	段部ヨコナデ、稜部ヨコナデ+寛削り
4	環	(12.0)	(2.5)		AC1	A	E	10	埋土	口縁部小さく直立、稜部ヨコナデ+寛削り
5	環	(11.9)	(2.8)		AD1	A	B	10	埋土	段部ヨコナデ、稜部棒状工具+寛削り
6	環	(11.9)	(2.9)		A1	B	A	10	埋土	稜部工具ナデ?+寛削り
7	環	(12.0)	(4.5)		A1	B	E	20	埋土	稜部棒状工具+寛削り
8	環	(12.9)	(3.4)		AD1	B	B	20	埋土	口縁僅かに内湾、稜部棒状工具+寛削り
9	環	(12.0)	(4.1)		A1	B	E		埋土	稜部棒状工具+寛削り
10	環	(13.0)	(3.7)		A1	B	C	10	埋土	段部工具ナデ、稜部棒状工具+寛削り
11	環	(12.8)	(3.8)		A1	B	C	20	埋土	内面黒色、稜部ヨコナデ+寛削り
12	環	(17.6)	(4.8)		A1	B	C	10	埋土	口唇部肥厚、稜部工具+寛削り
13	甕底部		(4.5)	7.3	AE5	B	B	25	埋土	器肉厚い、底面寛削り
14	甕口縁部	(20.0)	(3.3)		E5	A	B	10	埋土	頸部僅かに屈曲、外面斜め寛削り
15	甕	(16.0)	(7.1)		AD6	A	B	20	埋土	頸部僅かに屈曲、外面横寛削り

線的。比較的小形である。

遺物出土量は少量であるが、分布範囲は概ね住居跡範囲に収まる。

溝の南側にやや大形のピットが2ヶ所存在する。

竈対壁に壁際小ピットがかかる。本住居跡が新しい。

埋土は黒褐色土を主体と指、自然堆積土と考えられる。南壁はほとんど溝による擾乱を受ける。

遺物は遺構検出面で若干出土している。埋土下層か

第41号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	環	(11.9)	(2.3)		A1	A	B	20	埋土	口縁部外反、稜部はヨコナデ+寛削り
2	環	(12.0)	(2.5)		C1	A	E	10	埋土	器肉厚い、稜部ヨコナデ+寛削り
3	環	(12.0)	(2.8)		A1	B	E	20	埋土	稜部ヨコナデ+寛削り

第42号住居跡 (第91、92図)

本住居跡及びその周辺部は、現水田耕作土直下の比較的浅い部分で遺構の存在が認識されるが、黒褐色土が広く分布し、範囲を確定することは困難を極めた。

本住居跡については、当初カマド煙出し部分の僅かな焼土分布によって存在が確認できたのみである。住居跡範囲は検出段階と完掘段階でずれが生じている。

確認段階で把握された新日関係は、第44号住居跡によって切られるが、第6、36号住居跡とは僅かな間隔を置いている。

埋土層の堆積状態は自然堆積と考えられ、壁際に炭化材及びその崩壊土が認められた。埋土中から比較的

らはほとんど出土していない。

平面形はほぼ方形で3.10×3.08mを測る。主軸方向はN-30°-Eである。

床は地山直上で、ほぼ平坦。4本主柱穴であるが平面形に対応せず、整った配置ではない。

壁は残存部分では直に掘り込まれ、しっかりしている。幅狭の壁構が甕付近以外を巡る。

貯蔵穴、その他の施設は検出されなかった。

多量の遺物が出土している。

平面形は略方形で3.55×3.40m、深さ40cm前後を測り、主軸方向はN-131°-Eである。

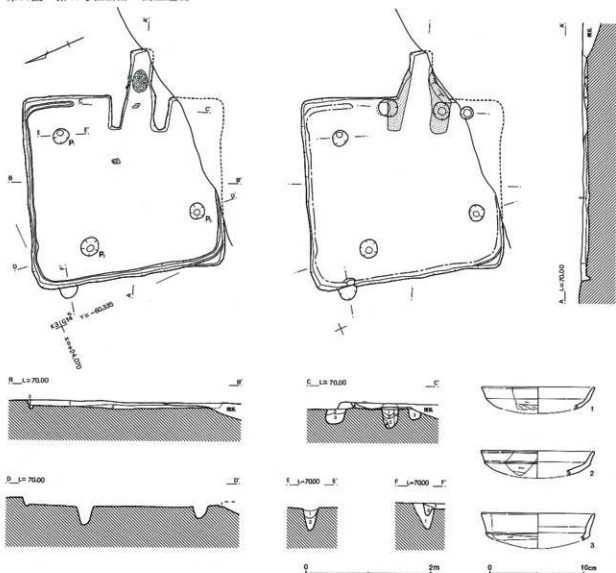
床はほぼ平坦で、硬質面は特に認められなかった。主柱穴はP2が深さ32cmで、他の2本は浅い。

貯蔵穴は南隅部、壁に沿って配置され0.54×0.40m、深さ30cm前後を測る。周辺部からは完形にちかい土器が数個出土している。

壁の遺存状態は良好で、特に北西壁下で壁材の一部とみられる炭化材及び炭化物が、壁に密着した状態で検出されている。壁溝は検出されなかった。

カマド-貯蔵穴部分で完形土器が多量に出土している。

第90図 第41号住居跡・出土遺物



第41号住居跡土層註

- 1 黒褐色 粘性強、焼土ブロック少量、炭化物少量、ロームブロック少量
- 2 黒褐色 粘性強、パミス多量、ロームブロック、ローム粒子多量
- 3 黒褐色 粘土質、粘性強、焼土ブロック微量、炭化物少量、ロームブロック少量
- a 暗褐色 灰褐色粘土少量、焼土、焼土粒多量
- b 暗赤褐色 焼土大量

柱穴土層註

- 1 暗褐色 粘土質、ロームブロック少量、パミス少量、マンガシ少量
- 2 暗褐色 粘土質、粘性強、ロームブロック多量
- 3 暗褐色 粘土質、粘性有、マンガシ微量
- 4 暗褐色 パミス多量、ローム粒、ロームブロック多量

掘り方は周辺部を掘り込み中央部を掘り残す形である。柱穴との構築順序は把握できなかった。

カマドは南西壁のほぼ中央部に位置し、遺存状態は良好である。

燃焼部は箱形で規模は 0.93×0.52 mを測り、袖袋付近の加熱赤変硬化が顕著である。天井部に架構された長甕が潰れた状態で出土している。

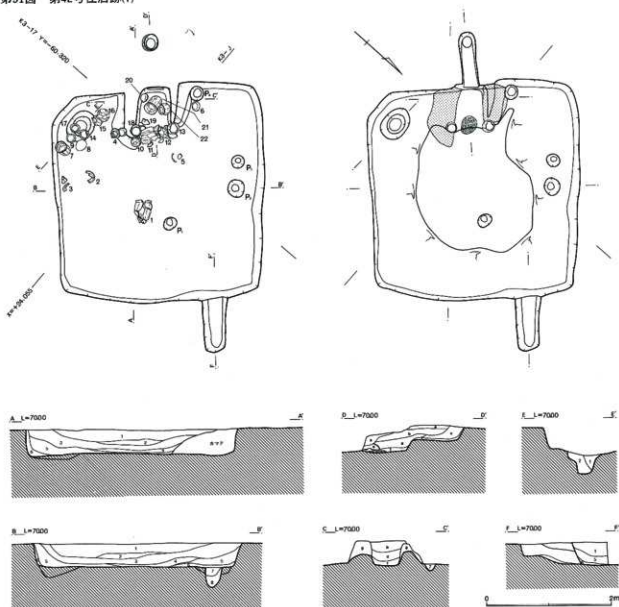
煙道部は規模は 0.83×0.26 mで、底面はほぼ平坦、

天井部分は良好に残存している。煙出し口は長楕円形で径 0.19 mを測る。

袖は掘り方埋め戻し後の構築と考えられ、長甕を焼き口部分、その他を地山で心材とし暗褐色粘質土を被覆している。

北東壁の北隅付近に旧カマド煙道が残存し、規模は 0.78×0.36 mを測る。断面によると埋め戻した痕跡は認められない。

第91図 第42号住居跡(1)



第42号住居跡土層註

- 1 黒褐色 粘性有、焼土ブロック少量、パミス微量、ロームブロック微量
- 2 黒褐色 粘性有、焼土粒微量、炭化物少量、パミス微量、ロームブロック少量
- 3 黒褐色 粘性有、焼土ブロック、炭化物微量、パミス微量
- 4 極暗褐色 粘性有、焼土ブロック多量、炭化物大量、パミス微量、ロームブロック微量
- 5 黒褐色 粘性有、焼土粒微量、パミス微量粘性あり、ロームブロック微量
- 6 暗褐色 粘性有、焼土、炭化物少量、パミス少量、ロームブロック少量
- a 暗褐色 粘性強、焼土多量、炭化物多量
- b 暗灰褐色 灰褐色粘土多量、焼土粒多量
- c 暗赤褐色 焼土大量
- d 暗赤褐色 焼土、焼土ブロック多量

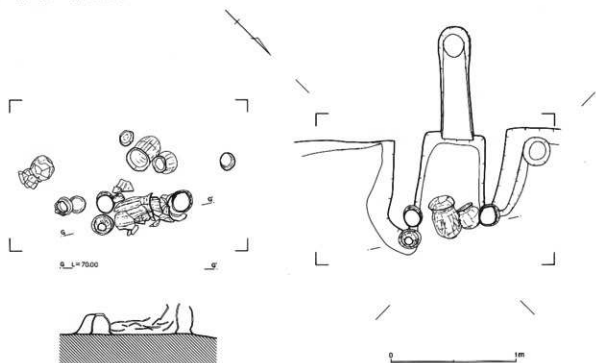
- e 暗褐色 焼土、焼土粒、焼土ブロック、炭化物少量、ローム、ローム粒少量
- f 黒褐色 粘性有、焼土、焼土粒少量、炭化物、炭化物粒大量
- g 暗褐色 暗灰褐色粘土、焼土、焼土粒、炭化物少量、ローム、ローム粒少量

柱穴土層註

- 7 黒褐色 ロームブロック多量
- 8 黒褐色 焼土、焼土粒微量、ローム粒、ロームブロック少量

貯蔵穴土層註

- 1 暗褐色 粘性有、ロームブロック多量
- 2 暗褐色 粘性強、焼土粒微量、ロームブロック少量



出土土器の総破片点数は278点である。環形土器は口縁部が26点、体部が54点。高環形土器は脚部が1点。甕形土器は口縁部が14点、胴部が173点、底部が10点出土している。

土器以外の出土遺物は白玉が2点出土している。環形土器は口縁部が外反するもの、内傾するもの、有段口縁をなすものがある。法量には大小があり、小形のもの(第93図2~3、5~6)は、第44号住居跡からの混入の可能性がある。

口縁部が外反する環形土器は体部がやや浅く、口径13.0cm前後ではほぼ一定している。稜部の成形手法は、口縁部横ナテ後、棒状工具によるナテと体部の篋削りによって造出するものが多い。体部篋削りは周辺部を行った後に、中心部を一定方向に削るものがほとんどである。

口縁部が内傾する須恵器坏身模倣のもの(19)は、破片を含めても少量に留まる。他の住居跡をみて同様に少ない。

稜部は輪積みによる段によって、大まかに造出され棒状工具によって成形される。口唇部に沈線はない。

体部篋削り後、若干のミガキが認められる。

有段口縁の環形土器は、法量に大小が存在する。段部の成形手法は20か噛い沈線によるが、21~23は横ナテと併用である。稜部は棒状工具が使用される。胎土中に多量の角閃石を含むものがほとんどである。

26、28は碗乃至鉢形土器で甕形土器底部の転用である。

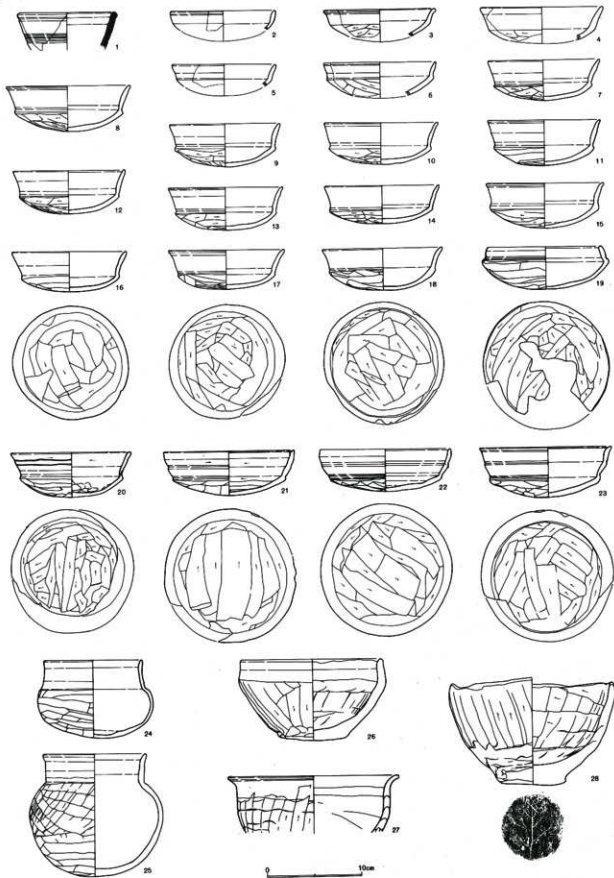
須恵器短頸壺の模倣とされる、小形の甕形土器が2点出土しているが、胎土は非常に精選されたものである。

甕形土器2点は小形のもので、単孔と多孔である。大形のは出土していない。

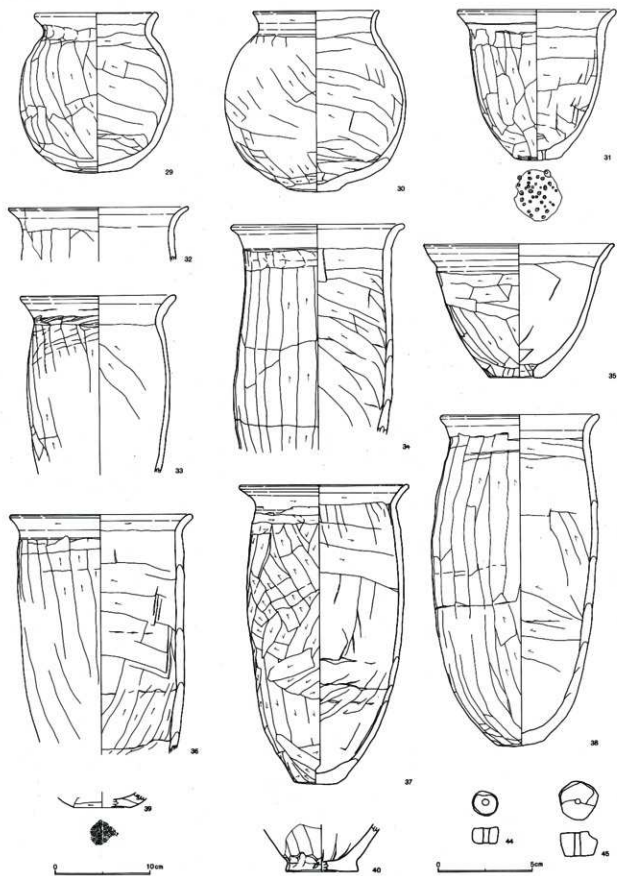
甕形土器は、胴部が膨らみを持たないものが主体で、器形は、胴部最大径が口縁部径よりも小さいか、ほぼ同一のものが大部分である。

頸部に僅かな屈曲乃至段を残すものと、段が篋削りにより削り取られ、口縁部に篋の痕跡による段を持つものがある。胴部外面は、大部分が上胴部まで縦篋削りされるが、33、37は僅かに斜め篋削りされ、42は頸部付近のみ斜め篋削りされる。

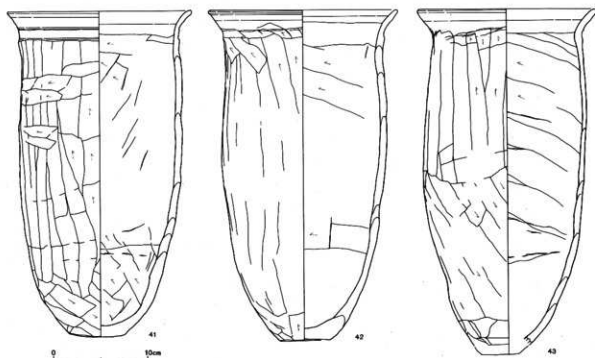
第93図 第42号住居跡出土遺物(1)



第94図 第42号住居跡出土遺物(2)



第95図 第42号住居跡出土遺物(3)



第42号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵磁	(10.0)	(4.0)		D1	A	G	25	埋土+SJ25	ロクロ左?回転
2	坏	(11.0)	(2.0)		A1	A	E	10	埋土	口縁部肥厚、稜部ヨコナデ+寛削り
3	坏	(11.7)	(2.9)		A1	A	A	10	埋土	口唇肥厚、稜部ヨコナデ+寛削り
4	坏	(12.8)	(3.5)		AD1	B	B	20	埋土	口縁外傾、稜部ヨコナデ+寛削り
5	坏	(10.9)	(2.3)		A1	A	E	10	埋土	口縁やや肥厚、稜部ヨコナデ+寛削り
6	坏	(11.8)	(3.5)		AC1	A	E	20	埋土	口唇やや肥厚、稜部ヨコナデ+寛削り
7	坏	11.9	4.3		AE5	A	C	95	Na6	ヨコナデ有段、稜部棒状工具?+寛削り
8	坏	13.0	4.8		A1	A	C	100	Na8	口唇凹む、稜部横ナデ、棒状工具+寛削り
9	坏	11.8	4.6		A2	A	C	100	Na9	口唇やや肥厚、稜部棒状工具+寛削り
10	坏	12.0	4.5		A1	A	C	95	Na23	口唇部肥厚、稜部棒状工具+寛削り
11	坏	12.0	4.8		A1	A	C	95	Na14	口唇肥厚、横ナデ有段稜部棒状工具+寛削り
12	坏	11.8	4.6		A1	A	C	90	Na8	口唇肥厚、稜部棒状工具+寛削り、歪み顯著
13	坏	12.2	4.5		A1	A	C	100	Na9	口唇肥厚、横ナデ有段稜部棒状工具+寛削り
14	坏	12.2	4.0		A1	A	C	100	Na14	口縁部外反、稜部棒状工具+寛削り
15	坏	12.4	4.9		A1	A	C	90	Na23	口唇部肥厚、稜部ヨコナデ棒状工具+寛削り
16	坏	12.1	4.3		A1	B	C	90	埋土	段部ヨコナデ、稜部棒状工具+寛削り
17	坏	12.3	4.1		A1	A	C	90	Na4	口唇部肥厚、稜部棒状工具+寛削り
18	坏	12.7	4.5		A1	A	E	90	Na20	口唇外反、稜部棒状工具+寛削り
19	坏	11.8	(4.5)		Cl	A	F	80	Na5	口縁部内傾、稜部横ナデ、棒状工具+寛削り
20	坏	12.5	4.8		AD1	B	A	70	Na14	段部沈線、稜部横ナデ、棒状工具+寛削り
21	坏	13.8	4.7		AC1	B	B	80	埋土	段部沈線、稜部棒状工具+寛削り、外面黒斑
22	坏	13.7	4.5		Cl	A	F	95	Na9	段部棒状工具、稜部工具+寛削り
23	坏	13.9	5.3		Cl	A	A	80	埋土	口唇沈線段部工具ナデ稜部棒状工具+寛削り
24	坏	10.3	(8.2)		A1	A	C	90	Na24	器内薄い、稜部は棒状工具+寛削り
25	壺	10.7	13.1		A1	A	C	95	Na17	風化摩滅顯著、体部は横寛削り
26	鉢	14.8	8.7	7.2	AE5	A	B	100	Na8	器内厚い、変底部転用か?体部は縦寛削り
27	鉢	18.0	(6.1)		E5	A	B	30	Na14	口縁部外反、体部は縦寛削り、輪積み痕
28	鉢		(11.3)	7.1	AE5	A	B	90		器内厚い、変底部転用、体部は縦寛削り

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
29	壺	13.1	19.1	5.7	AD5	A	B	90	No.1	外面黒斑、胴部は斜め筋割り、風化摩滅顯著
29	壺	12.7	16.9	7.3	AE5	A	B	100	埋土	外面黒斑、頸部指頭ナデ、胴部は縦筋割り
31	甌	16.3	16.0	5.3	DE5	A	A	100	No.10	外面黒斑、胴部は縦筋割り、小穴多孔
32	甕	19.0	(5.7)		A5	A	A	10	埋土	口縁外反、頸部以下縦筋割り
33	甕	16.0	(18.7)		A1	A	B	30	埋土	口縁外反、頸部縦筋割り底
34	甕	17.7	(23.7)		E5	A	A	90	No.13	口縁屈曲外反、頸部以下縦筋割り
35	甌	20.0	14.1	5.7	AE5	A	B	90	カマド、No.15	卑孔、外面黒斑、二次加熱
36	甕	18.9	(25.3)		E5	A	B	90	No.18	口縁屈曲外反、頸部以下縦筋割り、輪横み底
37	甕	17.6	31.5	4.7	E5	A	E	90	No.16	口縁屈曲外反、頸部以下斜め、縦筋割り黒斑
38	甕	16.3	34.9	4.9	AE5	A	B	99	No.7、21	口縁外反、頸部縦筋割り底、黒斑
39	甕底部	6.0	(1.6)		BE5	A	E	10	埋土	やや上げ底、底面木葉痕
40	甕底部		(5.1)	7.7	DE5	A	A	20	埋土	底部凸出
41	甕	19.5	34.4	6.0	AE5	A	B	99	No.21	口縁屈曲外反、頸部以下縦筋割り、黒斑
42	甕	19.7	35.0	5.3	E5	A	B	90	No.11、12、19	口縁外反、頸部縦筋割りによる段、黒斑
43	甕	18.5	(35.6)	4.0	E5	A	E	90	No.12	口縁外傾、頸部縦筋割りによる段、砂付着
44	白玉	上径1.3×下径1.2×孔徑0.35×厚さ0.8(cm)、重量2.2g								
45	白玉	上径1.4×下径1.5×孔徑0.3×厚さ1.3(cm)、重量7.1g								

第44号住居跡 (第96図)

本住居跡はK3J17グリッド付近に位置する。

第36、42号住居跡と共に第5住居跡群の南東端部に存在する。新旧関係は本住居跡が第42号住居跡を切って構築されている。耕作による擾乱顯著で一部床面下に削平が及んでいる。

平面形は方形で、規模は4.77×4.37mを測る。主軸方位はN-106°-Eを測る。

床は地山直上に構築され、貼り床は存在しない。掘り方は中央部を掘り残し四周を掘り窪めるものである。

柱穴は3本で、北東部分の相当する位置に検出できなかった。P3から柱痕跡が検出されている。

P1は径40cm、P2は径34cm、P3は径30cmで、いずれも

深さは30cm前後である。柱穴間隔はP1P2が2.36m、P2P3が1.50m、P1P3が2.64mを測る。柱穴配置はやや内側に寄った現状では三角形である。

壁は遺存状態が悪く残存する部分ではやや傾斜する。壁溝、貯蔵穴等は存在しない。

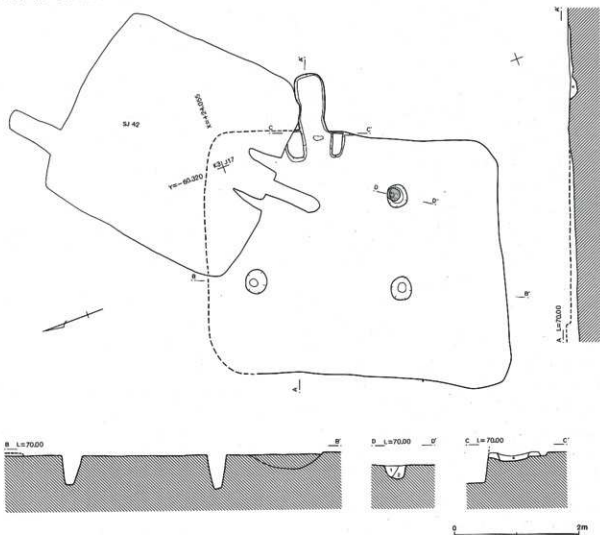
カマドは東壁やや北寄りに設置されるが、遺存状態が悪い。燃焼部底面はやや掘り込まれ、それ程焼けていない。規模は0.50×0.45m、深さ5cmを測る。燃焼部から煙道部へはそのまま移行する。煙道部はやや短く、底面はほぼ平坦。規模は0.88×0.45mを測る。袖部は灰褐色粘土を主体にして構築される。カマド壁は掘り込まれない。

出土遺物は小形で口縁部が小さく外反する環形土器が主体で、その他変形土器底部、土鏝が出土している。

第44号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	環	(11.0)	(3.4)		A1	A	C	20	埋土	口縁小さく直立、腰部はヨコナデ+筋割り
2	環	(11.1)	(2.9)		A1	A	E	10	埋土	口縁小さく直立、腰部はヨコナデ+筋割り
3	環	9.5	3.0		C1	A	A	50	カマド	口唇肥厚、腰部はヨコナデ+筋割り
4	環	10.6	3.3		AC1	A	E	50	埋土	口唇肥厚腰部ヨコナデ、棒状工具+筋割り
5	環	(11.0)	(3.1)		A1	A	B	20	埋土	口縁やや肥厚、腰部ヨコナデ+筋割り
6	環	(11.0)	(3.1)		D4	A	C	10	埋土	器内薄い、腰部ヨコナデ+筋割り
7	環	(12.0)	(3.7)		A2	A	C	10	埋土	口縁やや肥厚、腰部ヨコナデ+筋割り
8	環	(11.4)	(3.3)		C1	A	E	30	カマド	口唇肥厚腰部ヨコナデ、棒状工具+筋割り
9	甕底部	(2.2)		7.2	C2	B	B	25	埋土	底面指頭ナデ
10	甕底部	(3.0)		(8.2)	AD4	A	B	10	埋土	多孔、器内厚い
11	土鏝	長径(5.0)×最大径1.4×孔徑0.55(cm)、重量7.9g								

第96図 第44号住居跡・出土遺物

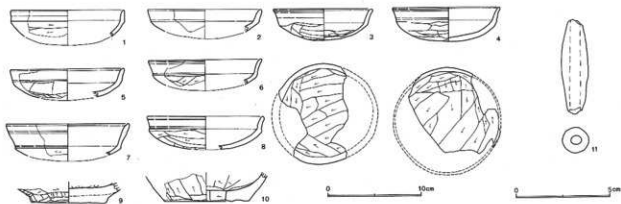


第44号住居跡 竈土層註

a 暗赤褐色 焼土、焼土粒、焼土ブロック多量、炭化物多量

第44号住居跡 柱穴土層註

1 黒色 焼土粒、炭化物少量、ローム、ローム粒多量
2 黒色 炭化物少量、ローム粒、ロームブロック多量



6. 第6住居跡群

第47号住居跡 (第98、99図)

本住居跡はK3J~K12グリッド付近に位置する。

第6住居跡群は全体に密集度が低い。第5、7、8住居跡群とは僅かな遺構空白域があり、北側は住居跡が存在しない。第6住居跡群のうち最も大形の住居跡である。

新旧関係は、本住居跡が第49、50、54号住居跡を切り、第48号住居跡によって切られる。

平面形は南、北壁がやや斜行する平行四辺形状で、規模は6.62×6.35m、深さ48cmを測る。

主軸方位はN-64.5°-Eを測る。

床面はほぼ平坦で、貼り床は検出できなかった。掘り方は略中央及びカマド付近を掘り残し、四周を掘りくぼめるもので部分的に深い。

床面出土遺物は少量でカマド周辺部から主に出土している。多量の炭化物カマド付近から西隅部分にかけて集中的に出土している。

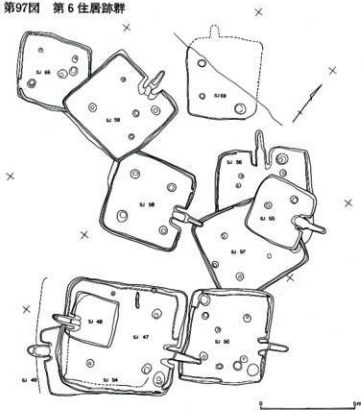
壁はほぼ直立し、掘り込みはしっかりしている。

壁溝はカマド部分及び東隅部以外に設置され、カマド左側は幅広い。掘り込みはしっかりしており、部分的に小ビットが検出されている。

主柱穴は4本で、P5以外は大形の略円形である。P1が径50×46cm、深さ68cm、P4が径60×52cm、深さ70cm、P5が径40cm、深さ78cm、P6が径57×40cm、深さ47cmを測る。その他間仕切り溝を挟んで両側にP2、P3が配置される。柱穴配置は南北壁に沿った、床面のほぼ中央、長方形をなす。柱穴間隔はP1P4が3.36m、P4P5が3.15m、P5P6が3.09m、P1P6が2.94mを測る。

貯蔵穴はカマド右側にあり、楕円形で南側は僅かな平坦面をなす。規模は1.25×0.94m、深さ0.2mを測る。

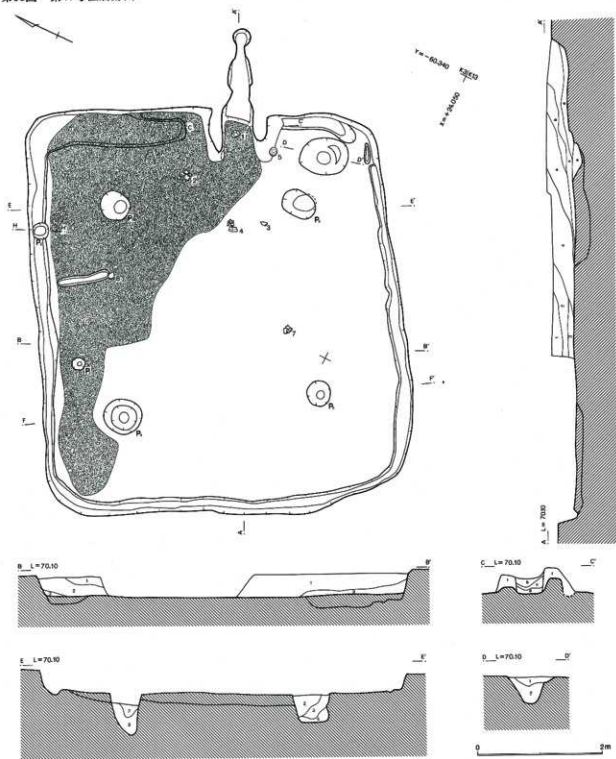
第97図 第6住居跡群



カマドは東壁僅かに南寄り設置され、遺存状態は良好である。燃焼部底面は良く焼けており、焚き口にかけて僅かに掘り込まれる。規模は0.78×0.47m、深さ0.56mを測る。奥壁寄りや左袖寄りから土製支脚が底面から浮いた状態で出土している。燃焼部奥壁から僅かに段をなして煙道部へ移行する。煙道部は底面はほぼ平坦で、先端部煙出し口が略円形(径27cm)の焼土範囲として良好に残存する。規模は1.30×0.53mを測る。袖部は地山を一部掘り残し、黒褐色土と暗灰褐色粘土を主体にして構築される。カマド壁は右袖はほとんど掘り込まれず、左袖が掘り残され、壁は僅かに段状をなす。

須恵器蓋の小破片で埋土中の出土である。38は混入と考えられる。土師器環形土器は小形で口縁部が外反するものが特徴的である。やや法量が大きいものと、少量の内湾するものが伴う。また器高が低く口縁部が大きく開く皿状の環形土器を伴う。その他鉢形土器、甕形土器等が出土している。土器以外では土簾1個体、編物石4個体が出土している。

第98図 第47号住居跡(1)



第47号住居跡土層註

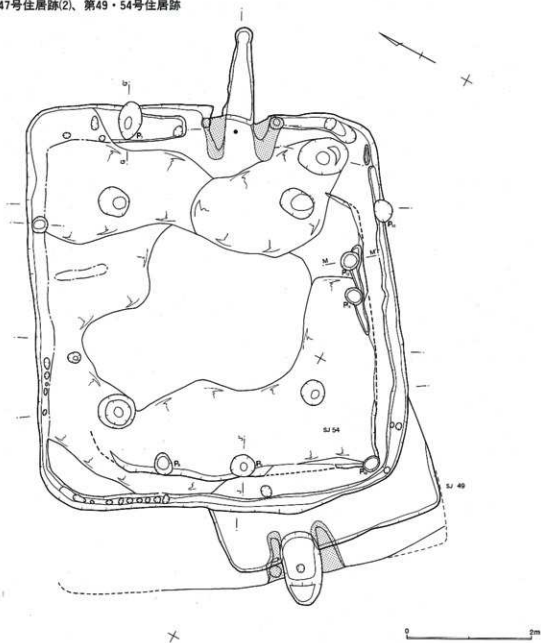
- 1 黒褐色 焼土、焼土粒、炭化物少量、ローム、ローム粒少量
- 2 黒褐色 焼土、焼土粒、白色粒多量、ローム、ローム粒、ロームブロック多量
- 3 黒褐色 焼土少量、炭化物多量、ローム、ローム粒多量
- 4 暗褐色 粘性強、焼土、焼土粒、炭化物多量、ローム、ローム粒少量

- a 暗褐色 粘性強、焼土、炭化物多量
- b 暗灰褐色 灰褐色粘土、焼土少量、炭化物微量
- c 暗灰褐色 灰褐色粘土、焼土、焼土粒、炭化物多量、ローム、ローム粒少量
- d 暗赤褐色 焼土層
- e 暗褐色 焼土、焼土粒、ローム、ローム粒少量

野織穴土層註

- 1 暗褐色 焼土、焼土ブロック少量、ローム、ローム粒少量
- 2 黒褐色 粘性有、焼土、焼土粒微量、ローム、ローム粒多量

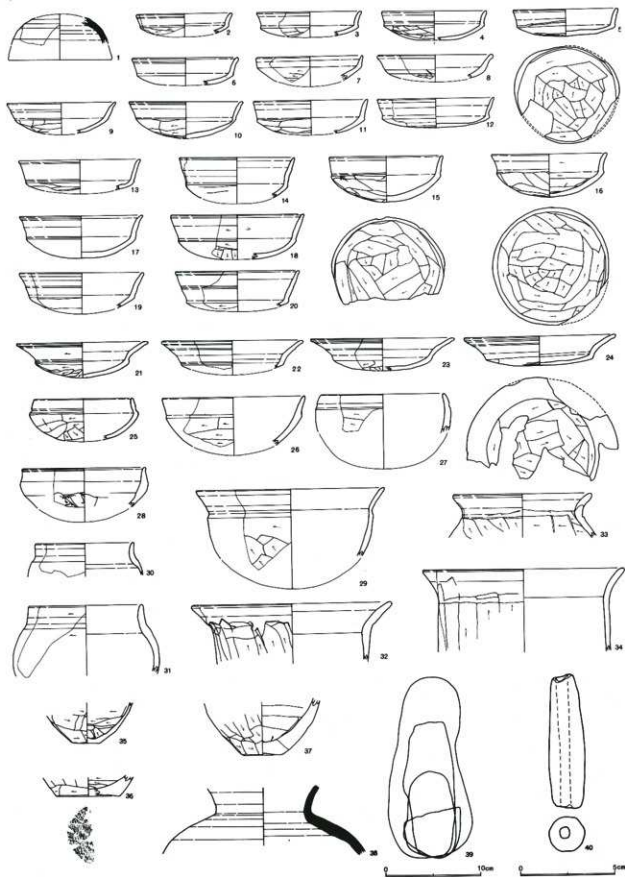
第99図 第47号住居跡(2)、第49・54号住居跡



第47、54号住居跡 柱穴土層註

- 1 黒色 焼土少量、ローム、ローム粒多量
- 2 黒褐色 粘性強、雑土、炭化物微量
- 3 黒色 焼土、焼土粒微量、ローム粒、ロームブロック多量
- 4 黒色 焼土、炭化物多量、ローム、ローム粒多量

第100図 第47号住居跡出土遺物



第47号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵蓋	(11.0)	(4.9)		D1	A	H	30	埋土+SJ72	ロクロ左?回転
2	環	10.1	(2.5)		C1	A	A	20	埋土	口唇肥厚、稜部はヨコナデ+笥削り
3	環	(11.0)	(2.8)		C1	B	C	10	埋土	口唇肥厚、稜部ヨコナデ(未調査)+笥削り
4	環	11.0	(3.2)		C1	B	B	30	埋土	口唇肥厚、稜部ヨコナデ+笥削り
5	環	11.1	3.0		A1	A	B	80	埋土	二次加熱で灰色変色、稜部ヨコナデ+笥削り
6	環	11.2	(3.0)		A2	A	C	20	埋土	口唇肥厚、稜部ヨコナデ+笥削り
7	環	(11.2)	(3.3)		A1	A	C	10	埋土	口縁小さく直立、稜部ヨコナデ+笥削り
8	環	(12.0)	(2.9)		C1	A	E	10	埋土	口唇肥厚、稜部ヨコナデ(未調査)+笥削り
9	環	11.6	(3.5)		A1	A	C	30	埋土	口縁部は沈線?稜部ヨコナデ+笥削り
10	環	12.0	4.0		A1	B	C	30	埋土	二次加熱で変色、稜部ヨコナデ+笥削り
11	環	12.2	3.8		A1	A	C	40	No.7	口縁部ヨコナデ、稜部ヨコナデ+笥削り
12	環	(12.4)	3.2		A1	B	E	20	埋土	段部ヨコナデ?、稜部ヨコナデ+笥削り
13	環	13.0	(3.6)		A1	A	B	40	埋土	口唇部肥厚、稜部はヨコナデ+笥削り
14	環	(12.0)	(5.0)		A1	A	C	20	埋土	口縁部ヨコナデ、稜部ヨコナデ+笥削り
15	環	12.0	4.9		A1	A	C	60	埋土	口唇肥厚、稜部ヨコナデ、棒状工具+笥削り
16	環	12.2	4.6		A1	A	B	90	No.8	口縁外反、稜部はヨコナデ+笥削り
17	環	13.2	4.5		A1	A	C	20	埋土	口唇肥厚、段部横ナデ、稜部工具ナデ+笥削り
18	環	(14.0)	(4.8)		C1	A	B	10	床下	口縁外反、稜部ヨコナデ、棒状工具+笥削り
19	環	(13.2)	(4.4)		A1	A	E	20	埋土	段部は工具ナデ、稜部工具ナデ+笥削り
20	環	(13.0)	(4.2)		A1	A	E	10	埋土	段部は棒状工具、稜部は工具ナデ+笥削り
21	環	14.0	3.8		C1	A	E	25	埋土	口唇外反、稜部はヨコナデ+笥削り
22	環	(14.9)	3.8		C1	A	A	10	埋土	段部工具ナデ、稜部ヨコナデ、工具+笥削り
23	環	(15.0)	3.6		C1	A	E	10	埋土	段部工具ナデ、稜部ヨコナデ、工具+笥削り
24	環	16.2	3.2		D1	A	A	70	No.4	段部工具ナデ、稜部ヨコナデ+笥削り
25	環	10.5	(4.7)		AD1	A	B	30	埋土	口縁内湾、稜部ヨコナデ、工具+笥削り
26	環	(15.1)	(6.3)		A1	A	E	10	埋土	口縁部外反、稜部はヨコナデ+笥削り
27	椀	(13.2)	(8.1)		A1	A	C	10	埋土	口縁部内湾、稜部は工具ナデ+笥削り
28	環	(13.0)	(5.8)		A1	A	B	10	埋土	口唇肥厚、稜部ヨコナデ(未調査)+笥削り
29	環	(20.1)	(10.8)		A1	B	C	10	床下	口縁外反、稜部ヨコナデ、工具ナデ+笥削り
30	椀	(10.4)	(3.6)		A1	A	C	10	埋土	口縁小さく直立、体部器内湾
31	椀	(12.0)	(7.6)		A1	A	C	20	埋土	口縁小さく直立、器内湾
32	甕口縁部	(20.4)	(6.5)		BD5	A	B	25	No.6	口縁外反、頸部縦、斜め笥削り
33	小形甕	14.6	(5.0)		AE5	A	B	25	No.3	口縁外反、頸部斜め笥削りによる段
34	甕	(21.4)	(9.0)		AD5	B	A	10	埋土	口縁外反、頸部~口縁部縦笥削りによる段
35	甕底部	(4.4)		3.0	E5	A	E	80	No.1	底径小さく器内湾
36	甕底部	(2.2)		6.9	A1	A	F	50	埋土	僅かに上げ底、底面木葉痕
37	甕底部	(5.8)		3.8	E4	A	B	70	No.8	器内湾厚
38	須恵蓋	(7.0)			DE1	A	H	20	埋土	ロクロ左?回転
40	土 鏝	長径(7.0)×最大径1.9×孔径0.5(cm)、重量23.9g								

第54号住居跡 (第99図)

本住居跡は、第47号住居跡の掘り方内で検出されたもので、遺存状態は極悪い。

平面形は不明確であるが、方形乃至長方形で、規模は4.40×4.30mを測る。住居跡の長軸方向はN-60°-Eである。壁の僅かに立ち上がりか南、西壁の一部に検出された。壁溝は南壁の一部に残存する。出土遺物は無い。

第48号住居跡 (第101図)

本住居跡はK3K12グリッド付近に位置する。第6住居跡群のうち最も小形の住居跡である。

新旧関係は、本住居跡が第49、47号住居跡、第1号土壌を切りもつとも新しい。

平面形は南東壁がやや歪むが小形のほぼ方形で、規模は2.62×2.58m、深さ32cmを測る。

主軸方位はN-67°-Wを測る。

床面はやや凹凸がある。貼り床、掘り方は検出でき

なかった。

出土遺物は比較的多くカマド内とその周辺部から主に出土している。

壁はやや傾斜気味であるが、掘り込みはしっかりしている。

壁溝、柱穴、貯蔵穴は存在しない。

カマドは西壁の南寄り、南西隅付近に設置される。遺存状態は良好である。

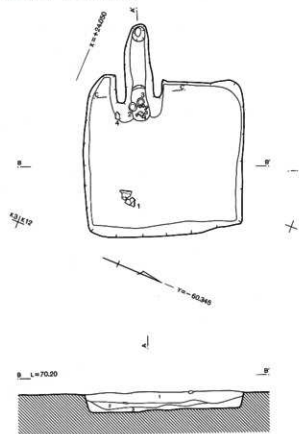
燃焼部底面は長楕円形状で、比較的良く焼けており、ほぼ平坦である。規模は0.60×0.44m、深さ0.30mを測る。燃焼部奥壁から段をなして煙道部へ移行する。燃焼部上層で完形の環形土器か据え置かれたような状態で出土している。

煙道部は壁外に向かって緩く立ち上がり、先端部は略円形（径20cm）のピット状にくぼむ。規模は0.97×0.40mを測る。

袖部は両袖とも黒褐色土を主体にして構築される。カマド壁は僅かな段をなし、左袖はほとんど掘り込まれず、右袖が斜めに掘り込まれる。

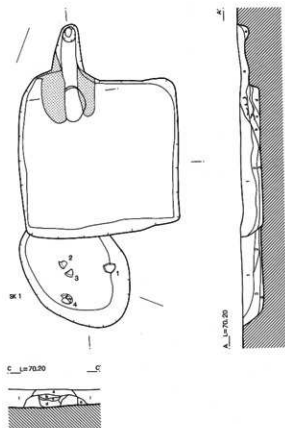
出土遺物は土師器環形土器、鉢形土器、甗形土器、甕形土器等が出土している。環形土器で特徴的なのは、極く小形で口縁部が外反するものと、やや大形であるが口縁部が小さく肥厚するものとが混在している点である。甕形土器は頸部に寛痕を持つものが出土している。土器以外では土鏝1個体が出土している。

第101図 第48号住居跡



第48号住居跡土層註

- 1 暗褐色 焼土粒、炭化物粒少量
- 2 暗褐色 焼土粒微量、ローム粒、ロームブロック大量
- 3 黒褐色 焼土粒、炭化物粒、炭化物多量
- a 暗灰褐色 粘性強、焼土粒、炭化物多量
- b 暗灰褐色 焼土粒少量、炭化物微量
- c 暗赤褐色 焼土層
- d 黒褐色 炭化物多量、ローム、ローム粒少量
- e 暗褐色 焼土粒、ローム、ローム粒少量

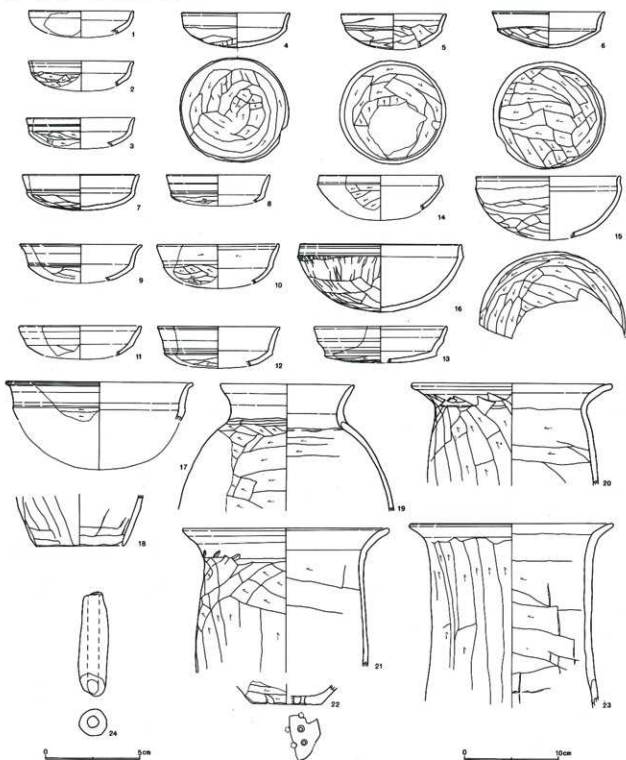


第1号土層土層註

- 1 黒褐色 焼土粒、炭化物粒少量、白色粒微量
- 2 暗褐色 焼土、焼土粒微量、ローム粒、ロームブロック大量
- 3 暗褐色 焼土粒少量、ローム、ローム粒、ロームブロック多量
- 4 黒褐色 焼土粒、炭化物多量

0 2m

第102図 第48号住居跡出土遺物



第48号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	环	(11.0)	(2.5)		A1	A	C	10	埋土	口縁小さく立ち上がる
2	环	11.0	(2.7)		AD1	A	C	20	埋土	口縁立ち上がり、稜部ヨコナデ+鋭削り
3	环	(11.4)	(3.0)		D1	A	C	20	埋土	二次加熱、稜部ナデ、稜部ヨコナデ+鋭削り

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
4	環	11.4	3.7		D2	A	C	90	No.3	口唇僅かに肥厚、後部ヨコナテ+寛削り
5	環	11.1	(3.5)		C1	A	A	80	埋土	口縁部内湾、後部棒状工具ナテ+寛削り
6	環	11.9	3.9		E2	A	C	95	No.2	口唇肥厚、後部ヨコナテ+寛削り、外面黒斑
7	環	12.2	3.8		AD1	A	A	40	埋土	後部はヨコナテ+寛削り
8	環	11.0	(2.9)		A1	A	E	20	埋土	段部工具で仕掛、後部は棒状工具+寛削り
9	環	(12.7)	(3.9)		A1	B	C	20	カマド	口縁部大きく外反、後部は棒状工具+寛削り
10	環	(12.9)	(4.1)		A1	A	B	10	埋土	口縁部内湾、後部は工具?ナテ+寛削り
11	環	(12.8)	(3.2)		A1	A	C	10	埋土	口縁部内湾、後部はヨコナテ+寛削り
12	環	(12.9)	(4.1)		A1	B	C	20	埋土	口唇肥厚、後部は棒状工具+寛削り
13	環	(14.0)	(3.9)		A1	A	B	20	埋土	段部工具ナテ、後部はヨコナテ+寛削り
14	環	(12.8)	(3.7)		A1	B	C	10	埋土	口縁小さく直立、後部ヨコナテ+寛削り
15	環	15.3	(6.5)		AD1	A	B	50	No.4	口縁屈曲、後部ヨコナテ+寛削り
16	環	17.0	(7.2)		AD2	A	E	25	埋土	口縁直立、後部棒状工具(未調査)+寛削り
17	環	(19.6)	(4.0)		A2	A	C	10	埋土	口唇肥厚、後部はヨコナテ+寛削り
18	瓶底部		(5.3)	(9.5)	D4	B	B	25	埋土	二次加熱、外面黒斑
19	丸 甕	14.1	(13.3)		D2	A	B	10	埋土	口縁外反、頸部以下横、斜め寛削り
20	甕	20.8	(10.9)		E2	A	A	80	No.1	口縁部外反、頸部斜め寛削り底
21	甕	21.5	(14.7)		CE4	A	C	70	カマド	口縁部外反、頸部斜め寛削りにより屈曲
22	瓶底部		(2.1)	(7.2)	A5	B	B	20	埋土	小穴多孔、器内厚い
23	甕	21.3	(19.5)		AE5	A	B	60	埋土	口縁部外反、頸部横寛削り
24	土 錘	長径(5.5)×最大径1.4×孔径0.6(cm)、重量9.8g								

第49号住居跡 (第99、103図)

本住居跡は K3K11~12 グリッド付近に位置する。

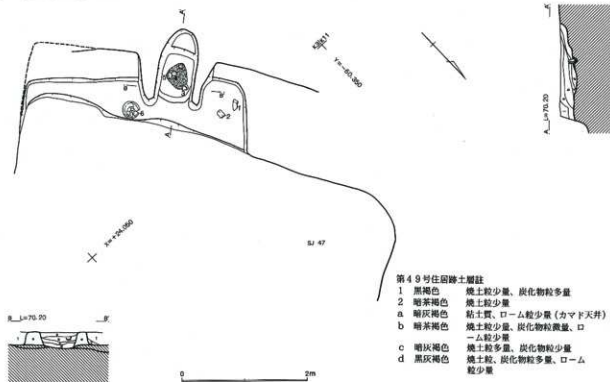
新旧関係は、本住居跡が第49、47号住居跡によって

切られる。

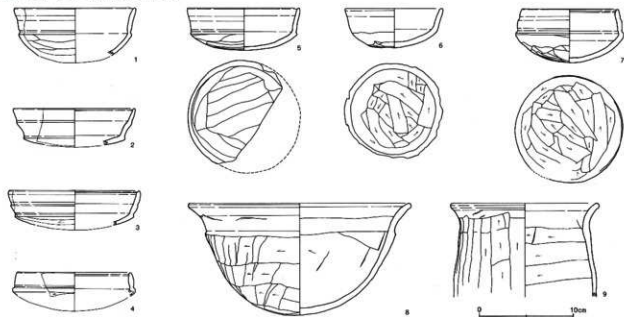
平面形は北東部床面が大部分破壊されているが小形

のほぼ方形と考えられるが、更に西壁外側に極薄い暗

第103図 第49号住居跡



第104図 第49号住居跡出土遺物



褐色土の分布が認められ、袖がこの部分まで達していた。住居跡範囲はこの部分が含まれる可能性もある。内側の規模は現在長3.63×1.70m、深さ22cmを測る。主軸方位はN-125°-Wで、住居跡軸と若干ずれる。

床面は残存部分は平坦。貼り床、掘り方は検出できなかった。出土遺物はカマド内と両袖周辺部から出土
第49号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	環	12.8	(5.1)		A1	A	C	20	埋土	後部棒状工具+笥削り
2	環	(12.8)	(3.9)		A1	A	B	10	埋土	段部ヨコナデ?、後部ヨコナデ+笥削り
3	環	13.8	(3.7)		C1	A	A	20	埋土	口唇沈線段部工具ナデ後部工具ナデ+笥削り
4	環	(12.0)	(2.5)		C1	A	E	10	埋土	口唇沈線、後部ヨコナデ+笥削り
5	環	11.4	4.1		A1	A	C	50	No.4	後部ヨコナデ、工具+笥削り、器肉薄い
6	環	10.3	4.1		A1	A	C	90	No.5	口唇僅かに外反、後部ヨコナデ+笥削り
7	環	10.1	(5.6)		CE1	A	B	90	No.3	段部棒状工具、後部棒状工具+笥削り
8	鉢	23.2	(11.8)		E2	A	B	90	No.6	口唇肥厚、後部ヨコナデ+笥削り
9	甕	15.4	(9.9)		AES	A	B	25	No.2	口縁やや外反、後部ヨコナデ+笥削り

している。壁溝、柱穴、貯蔵穴は存在しない。

カマドは西壁の北寄り、北西隅付近に設置される。燃焼部底面は楕円形状で、規模は1.00×0.60m、深さ0.26mを測る。煙道部は存在しない。燃焼部奥壁右袖寄りに支脚石が検出された。袖部は暗褐色土を主体にして構築され、カマド壁は掘り込まれない。

第50号住居跡 (第105、106図)

本住居跡はK3J13グリッド付近に位置する。

第6住居跡群の南東部にあり、第5、8住居跡群とは僅かな距離をおく。カマド北側はピット群が存在する。

新日関係は、本住居跡が第57号住居跡を切り、第47号住居跡カマドによって切られるが、壁はかろうじて

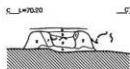
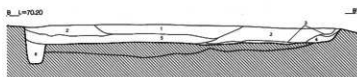
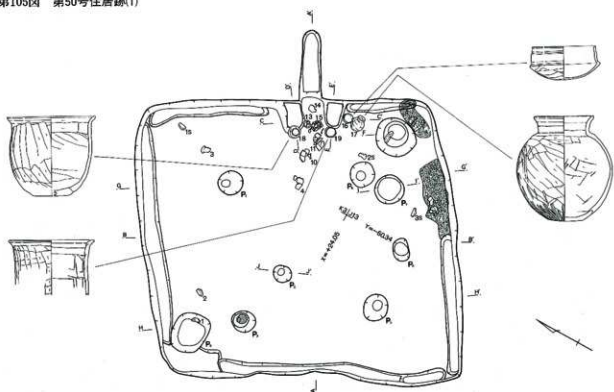
重複していない。

平面形は第47号住居跡と類似しており南東、北西壁がやや斜行する平行四辺形状で、規模は5.22×4.62m、深さ30cmを測る。

主軸方位はN-59.5°-Eを測る。

床面はほぼ平坦で、貼り床は検出できなかった。掘り方はカマド前面と南、西隅部を掘り残し、他の部分

第105図 第50号住居跡(1)

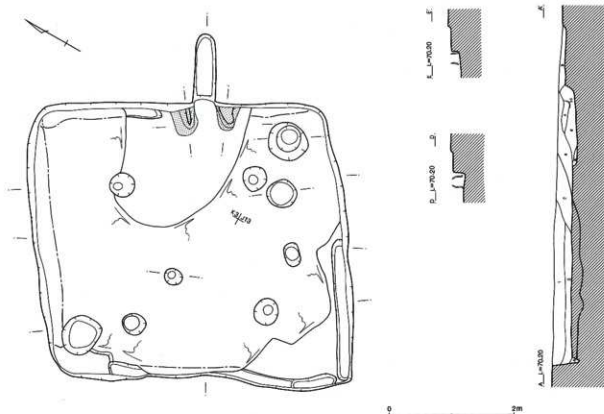


第50号住居跡 貯蔵穴土層註

- 1 黒褐色 焼土、焼土粒少量、ローム、ローム粒少量
- 2 黒褐色 焼土粒微量、ローム粒多量

第50号住居跡 柱穴土層註

- 1 黒色 焼土多量、ローム、ローム粒多量
- 2 黒褐色 粘性強、焼土、炭化物微量
- 3 黒色 焼土少量、ローム粒、ロームブロック多量



第50号住居跡土層註

- 1 黒褐色 焼土、焼土粒、炭化物少量、ローム、ローム粒多量、ロームブロック少量
- 2 黒褐色 焼土、焼土粒多量、ローム、ローム粒、ロームブロック多量
- 3 黒褐色 焼土少量、白色粒多量、ローム、ローム粒多量
- 4 黒褐色 焼土、焼土粒、炭化物少量、白色粒多量、ローム、ローム粒、ロームブロック大量
- 5 暗赤褐色 焼土、焼土ブロック大量、炭化物少量
- 6 黒褐色 ローム、ローム粒少量

- a 黒褐色 焼土、焼土粒、白色粒多量、ローム、ローム粒、ロームブロック多量
- b 黒褐色 焼土、焼土粒、ローム、ローム粒少量
- c 暗褐色 焼土、焼土粒大量、炭化物少量
- d 暗赤褐色 焼土、焼土ブロック大量
- e 暗褐色 暗灰褐色粘土、焼土多量
- f 黒褐色 焼土粒、焼土ブロック大量
- g 黒褐色 粘性強、焼土ブロック少量、ロームブロック多量
- h 黒褐色 焼土、焼土粒少量、ローム、ローム粒、ロームブロック多量

を掘りくはめるものである。

床面上出遺物はカマド付近から貯蔵穴周辺部、及び南東壁下で主に出土している。多量の炭化物及び焼土が南東壁下北半部から東隅部分にかけて出土している。

壁はやや傾斜する。壁溝はカマド部分及び北、西、南隅部、及び東隅部から南東壁中央部を除いて設置され、全体に幅広い。

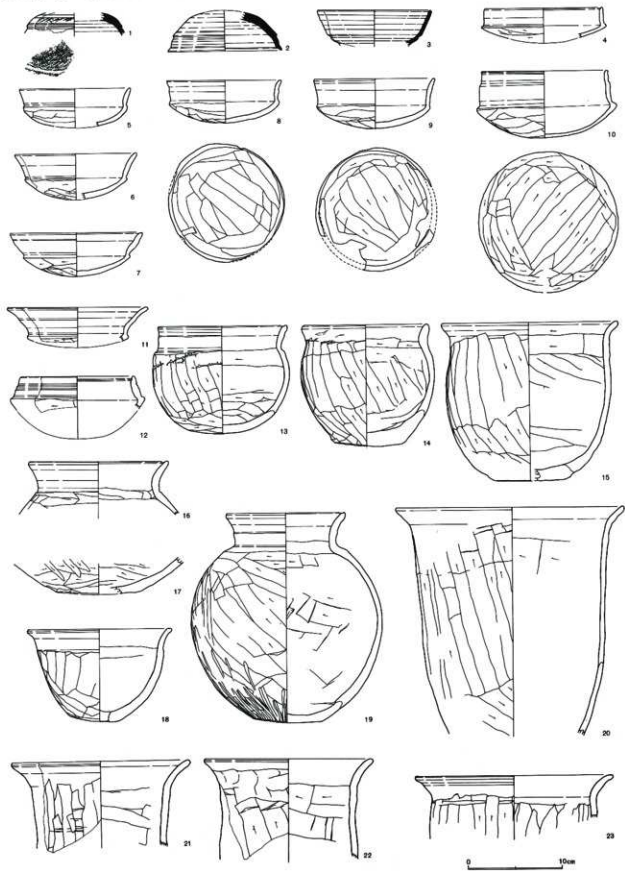
主柱穴は4本で、P3は柱痕跡が検出された。P1が径38cm、深さ50cm、P3が径35cm、深さ68cm、P5が径43cm、深さ68cm、P8が径43cm、深さ58cmを測る。その他に4本、南東壁下にP6、P7、床面中央付近にP2、西隅部にP4がある。P2が深い以外は比較的浅い。柱穴配置は南北壁に沿って床面のほぼ中央、方形をなす。

柱穴間隔はPIP3が2.19m、P3P5が2.20m、P5P8が2.11m、PIP8が2.22mを測る。

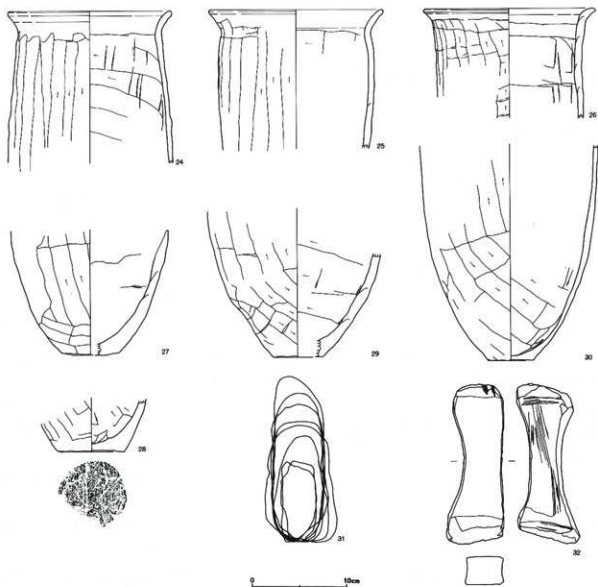
貯蔵穴はカマド右側、東隅部寄りにあり、略円形で中央部はさらに掘り込まれる。規模は0.65×0.60m、深さ0.38mを測る。

カマドは北東壁係かに南寄りに設置され、遺存状態は良好である。燃焼部底面は良く焼けておりほぼ平坦。規模は0.74×0.42m、深さ0.30mを測る。燃焼部から焚き口にかけて遺物が多量に出土している。燃焼部奥壁から段をなして煙道部へ移行する。煙道部は底面ほぼ平坦。規模は0.98×0.34mを測る。袖部は黒褐色土と暗灰褐色粘土を主体に構築され、両袖にも補強壁が検出された。須恵器蓋は全て埋土中の出土である。

第107図 第50号住居跡出土遺物(I)



第108図 第50号住居跡出土遺物(2)



第50号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵蓋		(2.5)		D1	A	H	10	床下	割突単位は4~5本/0.8cm
2	須恵蓋	12.2	(4.1)		D1	A	H	25	埋土	口唇部尖り気味、ロクロ左回転
3	須恵蓋	12.0	(3.9)		DF5	A	A	20	埋土	口唇部内面屈曲、ロクロ左回転
4	環	12.4	(3.8)		C1	A	A	30	埋土	口唇沈線、稜部ヨコナデ+寛削り
5	環	11.6	4.2		A1	A	C	30	埋土	口縁部外反、稜部ヨコナデ+寛削り
6	環	(12.8)	(4.9)		A1	A	E	20	埋土	口縁部外反、稜部棒状工具+寛削り
7	環	14.0	4.6		A2	A	B	20	埋土	段部工具ナデ、稜部棒状工具?+寛削り
8	環	12.2	4.5		A1	A	C	90	No.1	段部ヨコナデ、稜部棒状工具?+寛削り
9	環	12.8	5.3		A1	A	E	80	No.7	段部工具ナデ?、稜部ヨコナデ+寛削り
10	環	13.4	7.2		A1	A	B	95	No.16	段部棒状工具、稜部工具+寛削り、外面黒斑
11	環	(15.0)	(3.6)		C1	A	F	10	埋土	段部工具ナデ、稜部棒状工具+寛削り
12	環	(12.0)	(3.5)		A1	A	B	10	埋土	口唇沈線、段部棒状工具、稜部工具+寛削り
13	小形甕	13.7	11.5	6.0	A2	A	B	90	No.8	頸部以下縦削り、輪軸みぬ、外面黒斑

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
14	小形甕	13.0	12.9	7.2	A4	A	B	90	Na15	口縁小さく器肉厚い、頸部以下縦篋削り
15	小形甕	18.8	16.9	7.5	AE5	A	B	90	カマド、No18	口縁小さい、頸部以下縦篋削り、輪積み痕
16	壺口縁部	14.8	(6.0)		A1	A	C	30	貯蔵穴	口縁部外反、頸部以下横篋削り
17	壺底部	(3.3)	(3.3)	(9.0)	E4	A	F	20	埋土	底面篋削り
18	甕	15.4	9.8	5.0	A1	A	C	100	No.9	砂質、小孔穿孔、外面篋削り、黒斑
19	壺	12.5	22.3	7.5	C1	A	B	100	No17	頸部以下斜篋削り+ミカキ、外面黒斑
20	甕	24.0	(24.1)		AE5	A	B	60	カマド、No.4	口縁外反、頸部以下縦篋削り
21	甕	(18.0)	(9.0)		E5	A	B	20	埋土	口縁外反、頸部以下縦篋削り
22	甕	18.0	(11.0)		E5	A	B	20	No.3	砂質、口縁外反、頸部ナデ、以下縦篋削り
23	甕	21.0	(4.5)		AE5	A	A	30	埋土	口縁部屈曲、頸部以下縦篋削り
24	甕	17.5	(16.5)		AE5	A	B	30	No.1	口縁外反頸部屈曲、以下縦篋削り、輪積み痕
25	甕	18.2	(15.0)		AE5	A	B	25	No.4	口縁外反頸部屈曲、縦篋削り
26	甕	18.3	(11.5)		E5	A	A	80	No19	口縁小さく外反、頸部以下縦篋削り、黒斑
27	甕底部	(13.2)	(6.0)		A4	A	B	60	No.4	底面一定方向の篋削り
28	甕底部	(5.7)	7.0		AE5	A	B	80	No13	平底器肉厚い、底面木葉痕
29	甕底部	(11.1)	(5.2)		E5	B	A	80	No.6	器肉厚い、外面縦、斜め篋削り
30	甕	(23.0)	4.9		AE4	A	B	50	カマド、No.11、14	器肉薄い、外面縦、斜め篋削り
32	砥石	長径17.5×巾4.0-6.2(cm)								

第55号住居跡（第109図）

本住居跡は K3I13 グリッド付近に位置する。

第6住居跡群の北東部にあり東側はややおいてピット群が存在する。

新旧関係は、本住居跡が第56、57号住居跡を切る。

平面形は小形の方形で、カマド壁はカマド部分で僅かに段をなす。規模は3.35×3.25m、深さ38cmを測る。

主軸方位は N-77°-E を測る。

床面はほぼ平坦で、貼り床、掘り方は検出できなかった。

床面出土物はカマド前方に若干量出土している。

壁はほぼ直立し掘り込みはしっかりしている。壁溝、貯蔵穴は存在しない。

柱穴は2本でいずれも大形である。P1は柱痕跡が検出された。P1が径40cm、深さ58cm、P2が径38cm、深さ25cmを測る。

第55号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	須恵環	(9.1)	(2.4)		DF1	A	H	25	No.1	ロクロ左回転
2	環	(11.0)	(2.1)		AC1	A	B	5	埋土	口縁部直立、稜部ヨコナデ+篋削り
3	環	(11.0)	(2.4)		A1	A	E	10	埋土	口縁部外傾、稜部ヨコナデ+篋削り
4	環	(11.5)	(3.2)		A1	B	C	20	埋土	口縁部外傾、稜部棒状工具+篋削り
5	環	(11.0)	(2.9)		C1	B	E	25	埋土	口唇やや肥厚稜部ヨコナデ+篋削り内面黒色
6	環	10.3	(3.2)		AC1	A	B	30	カマド	口縁肥厚、稜部ヨコナデ+篋削り
7	環	(12.3)	(2.7)		C1	A	E	10	カマド	口縁外反、稜部ヨコナデ+篋削り

PIP2の柱穴間隔は1.46mを測る。

カマドは東壁のほぼ中央部に設置され、遺存状態は比較的良好である。

燃焼部底面はあまり良く焼けていない。規模は0.56×0.52m、深さ0.38mを測る。燃焼部奥壁から段をなして煙道部へ移行する。

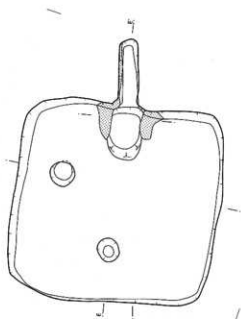
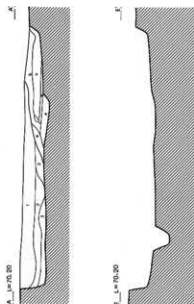
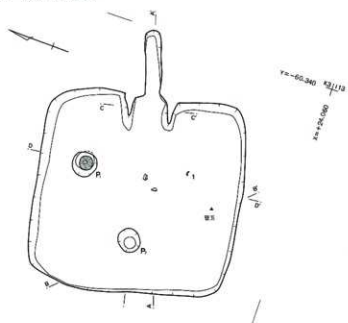
煙道部は緩やかに壁外に向かって立ち上がる。規模は1.07×0.33mを測る。

袖部はカマド壁を掘り込まず、暗褐色土と暗灰褐色粘土を主体にして構築される。

出土遺物は土師器環形土器、鉢形土器、甕形土器等が出土している。須恵器蓋は埋土中の出土である。破片総出土点数は912点で、環形土器302点、高環形土器13点、甕形土器597点である。

その他土鍾2個体、網物石1個体、貝巢穴痕泥岩2個体（総重量7.51g）が出土している。

第109図 第55号住居跡

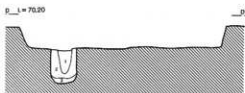
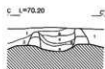
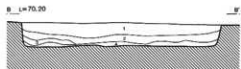


第55号住居跡土層註

- 1 黒褐色 焼土、炭化物微量、ローム粒少量
- 2 黒褐色 焼土、炭化物少量、ローム、ローム粒少量
- 3 黒褐色 焼土粒少量、ローム多量
- 4 黒褐色 ロームブロック微量
- a 暗灰褐色 粘性強、焼土、炭化物少量
- b 暗褐色 暗灰褐色粘土、焼土粒、炭化物粒少量
- c 暗褐色 焼土、焼土ブロック、炭化物少量
- d 暗赤褐色 焼土層
- e 黒褐色 焼土粒、炭化物、炭化物粒多量

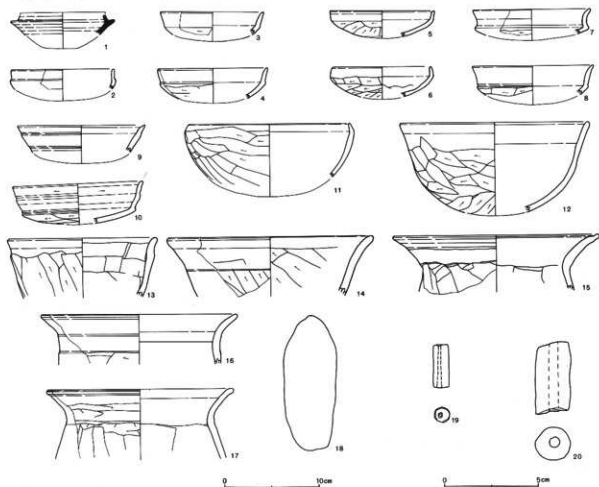
柱穴土層註

- 1 黒褐色 焼土、焼土粒少量、ローム、ローム粒少量
- 2 暗褐色 焼土少量、ローム、ローム粒多量
- 3 黒褐色 粘性強、炭化物微量、ローム、ローム粒少量



0 2m

第110図 第55号住居跡出土遺物



番号	器種	口径	器高	底径	粘土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
8	環	12.8	(3.1)		A1	B	C	30	埋土	口縁外反、稜部棒状工具+鋸削り、外面黒斑
9	環	13.5	(2.9)		C1	B	A	5	埋土	役部はヨコナデ、稜部ヨコナデ? + 鋸削り
10	環	14.0	(4.2)		A2	A	B	20	埋土	役部工具ナデ、稜部工具ナデ+鋸削り
11	環	17.0	(5.7)		AC1	B	B	50	埋土	口縁小さく内傾、稜部ヨコナデ+鋸削り
12	鉢	20.0	(9.4)		CD1	A	A	25	埋土	口縁外傾、体部斜め鋸削り、黒斑
13	鉢	15.6	(6.4)		A5	A	B	30	埋土、SJ56と接合	口縁肥厚、体部斜め鋸削り
14	鉢	21.5	(6.3)		A4	B	C	10	埋土	口縁外反、体部斜め鋸削り
15	甕口縁部	21.7	(5.9)		CD2	B	E	40	No.2	口唇肥厚、頸部以下斜め鋸削りによる段
16	甕口縁部	(20.8)	(5.4)		AD4	B	C	10	埋土	頸部僅かに屈曲、以下横、斜鋸削り
17	甕口縁部	(19.6)	(7.6)		AC5	B	B	20	埋土	頸部僅かに屈曲、以下縦鋸削り
19	管 玉	上径0.8×下径0.8×孔径0.25×厚さ2.3(cm)、重量2.8g								
20	土 鐘	長径(3.6)×最大径1.9×孔径0.55(cm)、重量14.2g								

第56号住居跡 (第111、112図)

本住居跡は K3H~112 グリッド付近に位置する。

第 6 住居跡群の北側にあり、条里環境界溝によって切られる。

新旧関係は、本住居跡が第57号住居跡を切り、第55

号住居跡によって切られる。

平面形はほぼま方形で、規模は 5.30×5.20m、深さ 30cm を測る。

主軸方位は N-41'-W を測る。

床面は遺存状態が悪く、第55、57号住居跡と重複す

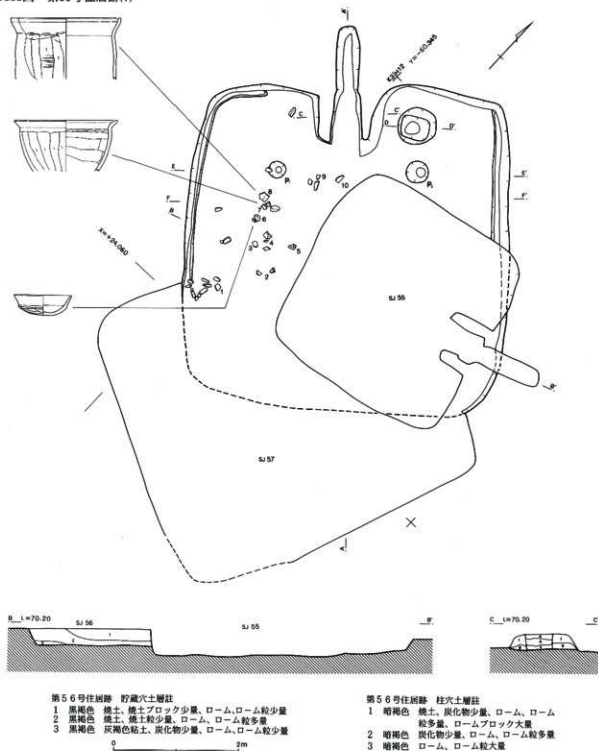
る部分では不明瞭であった。現存部は全体に硬質でほぼ平坦。掘り方、貼り床は存在しない。

床面出土遺物はカマド前方から南西部分で比較的集中的に出土している。細砂石が南西壁下の第57号住居跡と重複する部分でまもって出土している。

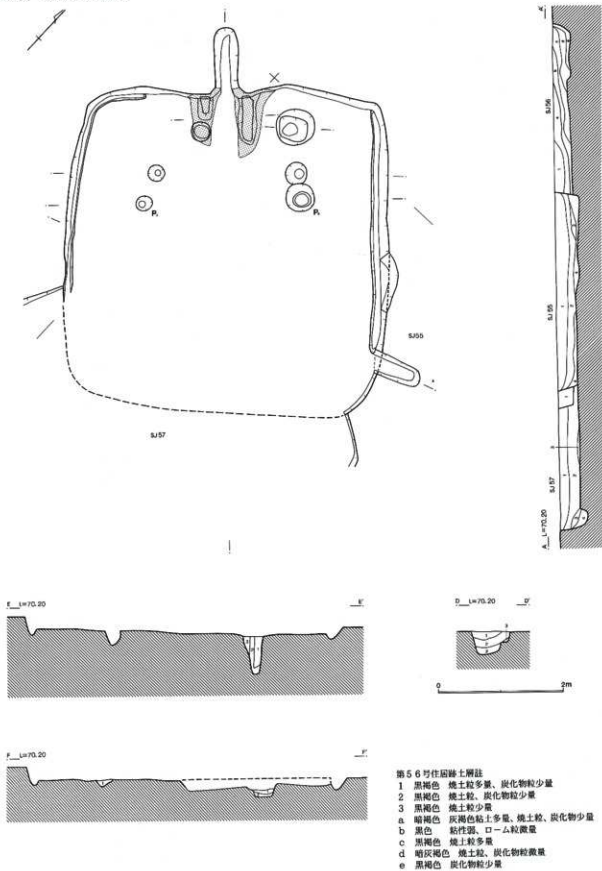
壁はやや傾斜するが、掘り込みはしっかりしている。壁溝はカマド壁の西隅部分から南西壁及び北東壁下に設置され、全体に幅狭い。

柱穴は4本であるが、P2がP4を切るためP3P4からPIP2へのつけ替えが考えられる。南半部の相当す

第111図 第56号住居跡(1)

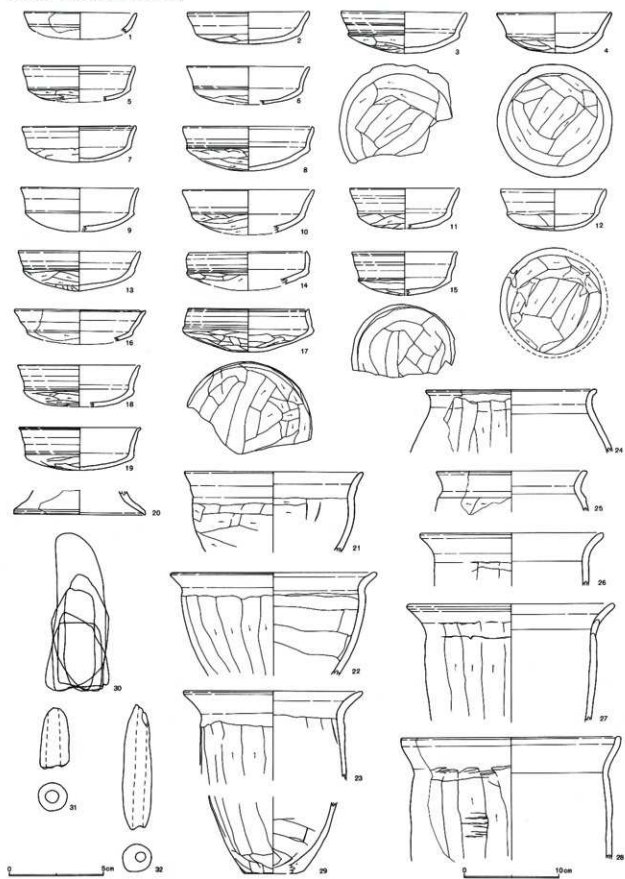


第112図 第56号住居跡(2)



第56号住居跡土層註
 1 黒褐色 焼土粒多量、炭化物粒少量
 2 黒褐色 焼土粒、炭化物粒少量
 3 黒褐色 焼土粒少量
 a 暗褐色 灰褐色粘土多量、焼土粒、炭化物少量
 b 紫色 粘性強、ローム粒微量
 c 黒褐色 焼土粒多量
 d 暗灰褐色 焼土粒、炭化物粒微量
 e 黒褐色 炭化物粒少量

第113图 第56号住居跡出土遺物



る位置に柱穴は検出できなかった。P1が径26cm、深さ24cm、P2が径34cm、深さ63cm、P3が径26cm、深さ11cm、P4が径48cm、深さ22cmを測る。

柱穴間隔はP1P2が2.27m、P3P4が2.56mを測る。

貯蔵穴はカマド右側、右袖寄りにあり、略楕円形で中央部はさらに長方形に掘り込まれ、左側は若干の平坦面をなす。規模は0.62×0.58m、深さ0.40mを測る。

カマドは北西壁僅かに南寄りに設置され、遺存状態は比較的良好である。

燃焼部底面は良く焼けており、焚き口にかけてはほぼ平坦である。規模は0.78×0.52m、深さ0.25mを測る。燃焼部から煙道部へはそのまま移行する。

煙道部底面はほぼ平坦であるが部分的に凹凸が認められる。規模は1.10×0.40mを測る。

袖部は両袖ともカマド壁をほとんど掘り込まない。左袖先端部はビット（径32cm）が掘り込まれる。袖部分は暗褐色土を基部として暗灰褐色粘土を貼りつけて構築される。

出土遺物は土師器・環形土器、鉢形土器、甕形土器等が出土している。総破片数は433点で環形土器が114点、甕形土器が319点である。

環形土器は口径13cm前後で口縁部が外反するものと、同じく有段口縁状になるものがある。甕形土器は胴部が膨らみを持たず口縁部が開き、頸部に縦溝割りによる痕跡的な段を持つものが主体をなす。20は台付き甕形土器の脚部。土器以外では土鏝2個体、織物石は図示したもの6個体、貝果穴凝泥岩が3個体、総重量3.87g出土している。

第56号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	環	(12.0)	(2.8)		D1	B	B	10	埋土	砂質、腰部はヨコナデ+寛割り
2	環	13.0	3.4		A1	A	E	25	埋土	器内厚い、口縁外反、腰部棒状工具+寛割り
3	環	13.2	4.4		AD2	A	B	60	Na10	段部工具、腰部棒状工具+寛割り、外面黒斑
4	環	12.0	4.3		A1	A	C	100	Na 6	口唇やや肥厚、腰部棒状工具+寛割り黒斑
5	環	11.8	(3.7)		A1	B	E	40	埋土	口唇内湾、腰部ヨコナデ+寛割り
6	環	13.0	(4.0)		A1	A	E	25	埋土	口縁外反、腰部棒状工具+寛割り
7	環	12.0	3.8		A1	A	C	30	埋土	口唇肥厚内湾、腰部ヨコナデ+寛割り
8	環	13.2	4.7		C1	B	F	30	埋土	口唇内湾、腰部棒状工具+寛割り
9	環	12.6	(4.6)		A1	A	B	30	埋土	口縁直立外反、腰部ヨコナデ+寛割り
10	環	14.0	(4.2)		A2	A	C	40	埋土	口縁外反、腰部棒状工具+寛割り、外面黒斑
11	環	11.5	4.3		A1	A	B	50	Na 5	口唇肥厚段部ヨコナデ腰部ヨコナデ+寛割り
12	環	11.2	4.4	5.8	A1	A	E	80	埋土	口唇内湾、腰部工具ナデ+寛割り、内面黒色
13	環	12.8	4.3		A1	A	E	50	掘り方	段部ヨコナデ、腰部ヨコナデ+寛割り
14	環	12.5	(3.5)		C1	B	E	35	埋土	砂質、腰部は棒状工具+寛割り
15	環	11.0	4.4		A1	A	C	40	Na 2	口唇肥厚段部ヨコナデ腰部棒状工具+寛割り
16	環	(13.9)	(3.8)		C1	B	E	10	埋土	口唇直立段部ヨコナデ腰部ヨコナデ+寛割り
17	環	12.8	4.4		AC2	A	A	50	埋土	段部工具ナデ腰部棒状工具+寛割り内面黒色
18	環	12.8	(4.4)		A1	B	C	25	掘り方	段部ヨコナデ腰部棒状工具+寛割り外面黒斑
19	環	13.0	4.5		A1	A	B	20	埋土	段部ヨコナデ、腰部ヨコナデ+寛割り
20	高環脚部		(2.7)	(14.0)	A1	B	C	10	埋土	先端部尖る
21	鉢	18.8	(8.6)		E5	A	C	20	埋土	口縁やや外反、頸部以下縦溝割り
22	鉢	22.0	(11.0)		AE5	B	B	25	Na 7	口縁外反、頸部以下縦溝割り
23	甕	19.2	(9.5)		E5	A	E	25	Na 4	頸部僅かに屈曲、以下縦溝割り
24	甕	(18.1)	(6.8)		AD5	A	E	10	Na 4	口唇肥厚、頸部以下縦溝割り
25	小形甕	(15.8)	(4.5)		DE5	B	F	10	埋土	口縁外反、頸部以下縦溝割り
26	甕	(19.3)	(5.7)		AE5	A	B	10	埋土	口縁外反、頸部僅かに屈曲、以下縦溝割り
27	甕	(22.3)	(12.5)		AE4	A	C	20	Na 3	口縁外反、頸部以下縦溝割り、輪積み痕
28	甕	(23.5)	(13.0)		E4	A	A	20	Na 8	口唇直立、頸部僅かに屈曲、以下縦溝割り
29	小形甕		(8.3)	(6.6)	AE5	A	B	50	埋土	底面木葉痕?
31	土 鉢	長径(3.2)×最大径1.5×孔径0.7(cm)、重量5.7g								
32	土 鉢	長径(6.6)×最大径1.5×孔径0.5(cm)、重量12.1g								

第57号住居跡 (第114図)

本住居跡は K3I12~13 グリッド付近に位置する。

新旧関係は、本住居跡が第50、55、56、58号住居跡によって切れ、重複する住居跡の中でもっとも古い住居跡である。

平面形は南壁がやや長い台形状で、規模は5.25×4.87m、深さ30cm前後を測る。

主軸方位は N-27°-E を測る。

床面は第55、56号住居跡と重複する部分では遺存状態が悪く不明瞭であった。他の部分はは完全に硬質でやや凹凸がある。掘り方、貼り床は存在しない。

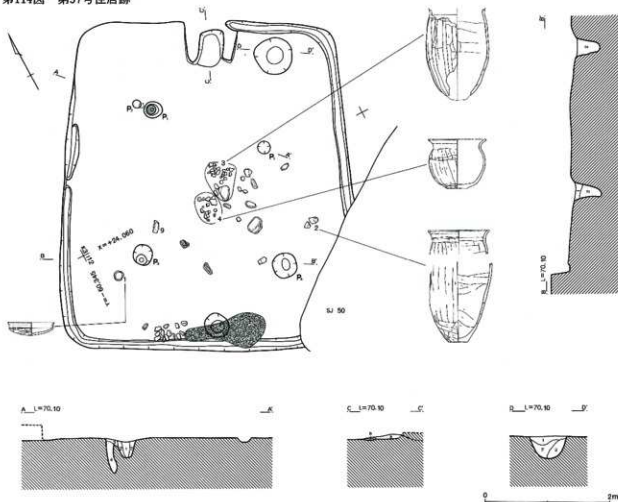
床面出土遺物は中央部から南半分に比較的集中して

いる。やや大形の石が P4P5 の西側中央付近と P3 の東側で、床面からやや浮いた状態で分布していた。P4P5 付近のものは馬歯が出土している。縄物石が南壁下中央部の焼土下層からまとめて出土している。

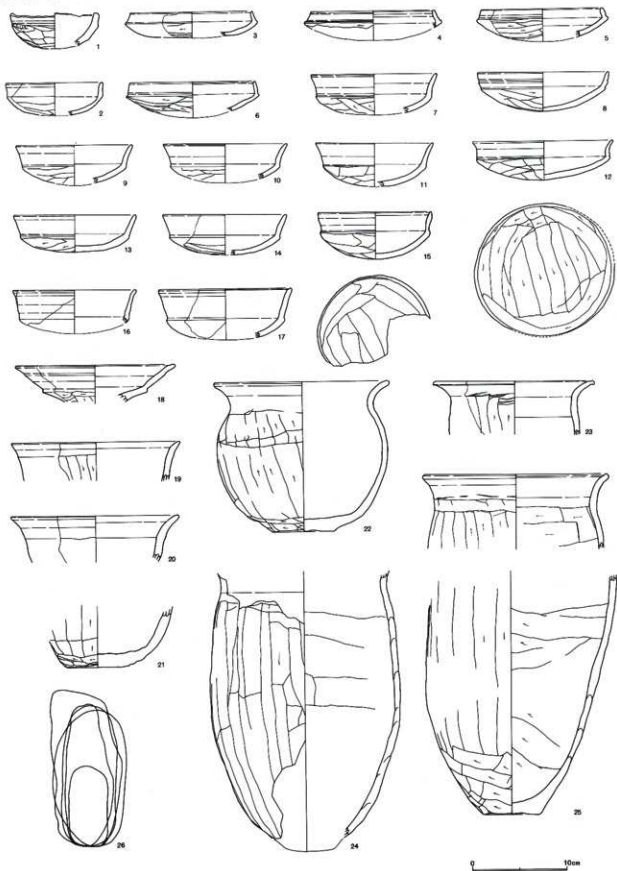
壁は北西、南東部分はほとんど残存していない。やや傾斜するが、掘り込みはしっかりしている。壁溝はカマドの左側から西壁部分とその一部が欠落する。南東隅は設置されていたと考えられる。

柱穴は5本であるが、P1、P2はP1が新しい。P5は落ち込み状で小形で極く浅い。P1は柱痕跡が検出された。P1が径30cm、深さ30cm、P2が径15cm、深さ54cm、P3が径32cm、深さ54cm、P4が径40cm、深さ50cm、

第114図 第57号住居跡



第115図 第57号住居跡出土遺物



P5が径20cm、深さ10cmを測る。

柱穴配置は、P5が中央寄りにずれた台形状である。柱穴間隔はP1P3が2.38m、P3P4が2.33m、P4P5が1.85m、P1P5が1.86mを測る。

貯蔵穴はカマド右側に位置し、略円形。規模は0.60×0.58m、深さ0.38mを測る。

カマドは北壁のほぼ中央部に設置され、遺存状態は悪く重複によりほとんど破壊されている。

燃焼部底面はほとんど焼けていない。焚き口にかけて楕円形状に僅かに掘り込まれる。規模は0.54×0.38m、深さ5cmを測る。煙道の存在は不明である。

第57号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置	備考
1	椀	9.5	(3.8)		A1	A	C	80	掘り方	稜部ヨコナデ+寛削り、内面黒色
2	環	(10.3)	(3.5)		AE1	A	C	20	埋土	口唇肥厚、稜部ヨコナデ+寛削り
3	環	(13.0)	(2.8)		A1	A	A	10	埋土	口唇尖る。稜部ヨコナデ+寛削り
4	環	13.0	(3.1)		A1	A	A	25	No.4	砂質、口唇肥厚、稜部棒状工具+寛削り
5	環	(12.8)	(3.5)		A1	A	F	20	埋土	砂質、口縁部内傾、稜部棒状工具+寛削り
6	環	13.4	(3.5)		A1	A	B	25	埋土	砂質、口唇沈線、稜部工具ナデ+寛削り
7	環	13.4	(4.4)		A1	A	E	25	埋土	口唇内湾、稜部棒状工具+寛削り
8	環	(14.0)	4.2		AE1	A	B	20	埋土	器内厚い、段部工具ナデ、稜部工具+寛削り
9	環	(12.4)	(4.0)		A1	B	C	20	埋土	口縁外反、稜部ヨコナデ+寛削り、黒斑
10	環	(13.0)	(3.7)		A1	B	C	20	埋土	口唇肥厚、稜部棒状工具?+寛削り
11	環	12.5	(4.6)		A1	A	C	30	埋土	口縁外反、稜部ヨコナデ+寛削り、内面黒色
12	環	15.0	4.2		A1	A	C	90	No.1	砂質、口唇外反、稜部ヨコナデ+寛削り
13	環	13.0	3.9		A1	B	E	30	埋土	口縁外反、稜部棒状工具+寛削り、外面黒色
14	環	(13.2)	(4.3)		A1	A	E	20	埋土	口縁外反、稜部棒状工具+寛削り
15	環	12.0	5.0		A1	B	E	60	埋土	口唇内湾段部ヨコナデ稜部棒状工具+寛削り
16	環	(13.2)	(4.6)		A2	A	C	10	埋土	器内厚い段部棒状工具稜部ヨコナデ+寛削り
17	環	(14.2)	(5.2)		A1	B	B	10	埋土	口唇沈線、稜部工具ナデ+寛削り
18	高環	(17.0)	(4.0)		AC1	B	C	20	埋土	口唇外反、段部工具ナデ+寛削り
19	鉢	(18.0)	(4.0)		E5	A	B	10	埋土	口縁外反、頸部以下縦削り
20	鉢	(18.0)	(5.0)		D5	B	B	10	埋土	口縁外反、頸部以下寛削り
21	斐底部	(6.8)		6.4	E4	A	B	70	No.4	器内厚い、底面寛削り
22	小形斐	18.7	15.8	6.5	E5	B	A	60	No.4	口縁外反、頸部以下縦削り、底面寛削り
23	斐	(17.3)	(5.6)		E5	A	B	10	埋土	口縁外反、頸部以下縦削り、寛底
24	斐		(29.5)		E5	B	F	30	No.3	頸部以下縦削り、黒斑
25	斐	19.9	(25.0)	6.0	DE5	B	A	60	No.2	口縁外反、頸部以下縦削り、底面寛削り

第58号住居跡 (第116、117図)

本住居跡はK3I11グリッド付近に位置する。

第6住居跡群のほぼ中央に位置し重複関係は少ない。

新旧関係は、本住居跡が第59号住居跡によって切られ、第57号住居跡を切る。

袖下層部が僅かに遺存しているが、暗褐色土で構築されている。

出土遺物は土師器環形土器、鉢形土器、高環形土器、甌形土器、斐形土器等が出土している。図示した以外の総破数は490点で環形土器が188点、高環形土器4点、甌形土器1点、斐形土器が297点である。土器以外では編み物石が図示した5個体以外にも出土している。貝果穴珉泥岩が2個体、総重量5.77g出土している。

環形土器は口縁部が外反するものが主体をなし、同じく有段口縁状になるもの、口縁部が内傾するものがある。少量の小形の環形土器が伴う。

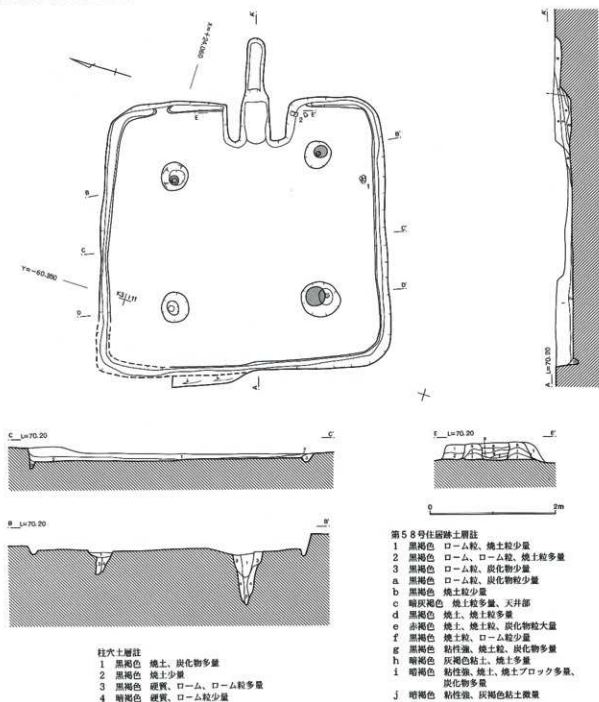
平面形は北壁がやや斜行するほぼ方形である。規模は4.74×4.41m、深さ27cmを測る。

主軸方位はN-73.5°-Eを測る。

床面は全体に硬質でほぼ平坦である。掘り方、貼り床は存在せず、地山直上か床面である。

床面出土遺物は少量でカマド部分に集中している。

第116図 第58号住居跡(1)



壁は北西隅部分が重複により破壊されているが、他の部分はほぼ直立し、掘り込みはしっかりしている。

壁溝はカマド部分とカマド壁の一部を除いて設置されている。

柱穴は4本で比較的大形で深い。P1、P3、P4には柱底跡が検出された。P1が径43cm、深さ38cm、P2が径48cm、深さ50cm、P3が径62cm、深さ80cm、P4が径

42cm、深さ83cmを測る。

柱穴配置はP4が壁寄りにややずれるが、ほぼ長方形である。柱穴間隔はP1P2が2.06m、P2P3が2.50m、P3P4が2.28m、P1P4が2.32mを測る。

貯蔵穴は検出できなかった。

カマドは東壁ほぼ中央部に設置され、遺存状態は良好である。